5356

91

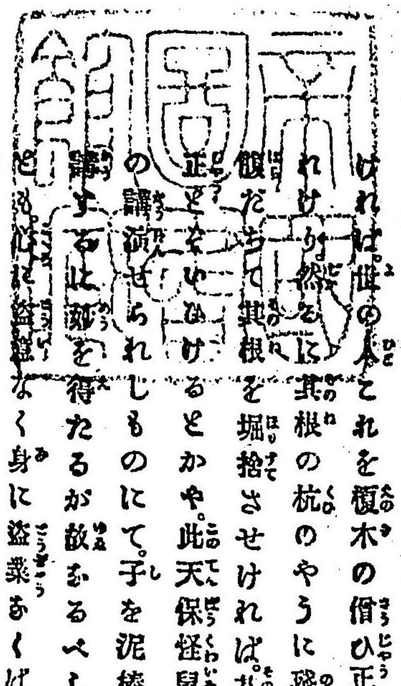
天保怪鼠傳

上

松林伯圓講演
酒井昇造速記

はしがき

むかし良覺僧正といひし聖ありけり。此法師の住みける寺に。大なる榎木あり



ければ。世の人これを榎木の僧ひ正といしを。こゝろよからずとて此木を切られけり。然るに其根の杭のやうに殘りければ切杭の僧正といひけるを。いよゝ假だちて其根を堀捨させければ。其跡また池のやうにありたるゆゑ。堀池の僧正とぞいひける。とかや。此天保怪鼠傳は。世に泥棒伯圓と稱ばるゝ松林伯圓氏の講演せられしものにて。子を泥棒伯圓と稱ひなすは。けだし子が義賊の傳を講ずる此部を得たるが故なるべし。されば。よしや泥棒伯圓のあだし名は取るに足らず。心に盜賊なく身に盜業なくば。なぞか天地に耻る所やはある。また思ふに鼠小僧の如きは。一生を盜賊のうちに終りて。宋の世までも賊名の消ゆる時なけれど。今の世に多く見る所の。彼の法律を學ひて法網の潜り易からん事を工夫し口に道德を說きながら心に敗德を思案する。僞學者や僞善者に比ふれば。いさゝか恕すべき所あきにあらずかし。殊に鼠小僧は卑賤の家に立生し無敎育の一匹夫なれば敢て咎むるにも及ばず。だが惡むべきは此明治の大御代に

生れあひて。完全なる教育をうけながら。却て無教育の鼠小僧に如かざる徒の多きにあり。嗚呼またあげかはしき極ならずや。今此序文をものする序に。かねて佛が說たまいし十善戒の第二にある。不偷盜戒の一節を詠歌して。地獄に苦しめる鼠小僧の追福を祈り。あはせて此戒を犯さんとするものゝために警めんとはつす。あはれ見ん人其の心してよかし

不偷盜戒の心を

人みそは見ね天地の
夜毎日毎にかけめぐり
人をたばかり欺きて
心の底ぞあさましき
かねて世尊の說れたる
重き其身を汚しそる

神ぞ隈おくみそなはす
人の垣内をうかゝいて
黃金白金うば丶んと
金銀や財寶は戶の隙を
敎へおりける世の人等

あかるき世とも白波の
たからを掠め或はまた
身も棚しらにさ迷へる
もる丶塵より輕しとは
かるき財寶のその爲に

明治三十年三月中旬

水花園主人　菟道春千代誌

洪耳玲

特8
696

天保怪鼠傳上

松林伯圓講述
酒井昇造速記

第一席

今回速記講談と申す講談の速記本が出ました其間に伯圓の鼠小僧を出しましたいから講演して呉ろと鈴木氏より申込まれました然るに幕府の末より御維新の始めに至りまして伯圓の綽名を市中へ伯圓と申します此仇名即ち異名といふものは貴人へ対して付けまする甚しきは幕府御繁昌の頃はひぢ代々の将軍家へ対しても落にては何々公方何々將軍と仇名を附まする其他時の御役人御老中町奉行に至る迄仇名を附まする當今に至つては大臣方の仇名さへ時々新聞紙上に散見いたします位況ん

や多寡の知れたる講談師風情仇名を附られることを殘念とも思はず又名譽とも心得ませんけれども何とか外に名の附やふもあらうに泥棒伯圓とは世間へ對して何やら恥かしいことに存じます併全國至る所泥棒とは盗賊のことだとは思ひませぬ是はホンの關東に於て盗賊の事を泥棒といふのみで最早大坂京都邊で泥棒と云へば何か箸にも棒にも掛らぬ無頼漢のやうに心得て居りまする故に東京の泥棒伯圓が大坂へ來た抔と云ふ心持は仕方のあい破落戸だと斯う思はれるのであります最早三十年も經過ますから何うでも宜しうございますが現に此間演藝叢談の廣告を見ますると第四號は天保怪鼠傳是は有名なる泥棒伯圓が講演に係る酒井昇造氏の速記に成るものと記してありましたが此等は版元の注意ではありませうが伯圓身に取りましては餘り嬉し

からぬ廣告でありますが然れ共假令惡名にいたせ天下に其名を揚げるといふは先ず演藝者の本望としなければなりますまい然れば版元の需に應じて今日より更に鼠小僧のお話を一層入念に講演いたしまする

夫れ國に盗賊家に鼠は古より狩尽すにも盡されず實にや濱の砂子で千萬年の末に至りましても決して尽きるといふ事はありますまいけれども同じ賊を爲しても奸賊あり兇賊あり又は義賊此義賊と云ふ類に至つては餘程六ッかしい話でありますが或學者の申されるには義があつて賊を働くものは無いといふ然れば義賊といふは下題を附るものゝ誤りであると斯う云はれまするが又一方の博士の仰しやるには爾うであい惡中にも善あり賊にも義あり鼠小僧の如きは其生涯の行爲を見るに大名諸侯の御手許金

を奪ひ縱し千兩二千兩を奪ふとも汲めども尽きぬ泉の水大名の御手許金抔は又湧いて出る所もあり其後に深く迷惑は懸ませぬ爾うして其金を今日活路に迫る貧民へ施し下々の潤澤にすると いふ頼まれもせぬ無益の事をすると云はゝ言ふものゝ今日艱難稼いで漸くに一家の糊口を凌ぐといふ哀れ果敢なき家に無慙にも賊に這入り甚しきは小兒の着て居るものを剝取り又は其良人を縛し之を强迫して少しく容貌好き妻が傍にあれば强姦して獸慾を恣にする抔といふ實に此等は兇賊とも謂つ可く鼠小僧の如きは決して左樣な行爲はありませず入水をせんとする者縊れて死なんとする者又は刄を以て自害をせんとする者此等を助けたるあと枚擧するに遑あらず其都度何れ貧困の餘り箇樣な無分別に陥たることを聞糺し携へたる金銀を者ます之に惠み而して其

生命を助けると云ふ然れは現今に至るまで石碑に香華の絶へざるは全く積善の餘慶でもありませふか左りながら今日盜賊を働いて仁を多くの人に施したのであるから一方には慈悲を懸しとは云ふものゝ一方に惡事を働きましたので天何ぞ之を助けませふ然れば天保三年に至つて三十七歳を一期として江戸市中半數を引廻され終には斬首の刑に處せられ本所回向院境内に僅に墓標を殘し「德善信士」と云ふは即ち鼠小僧の改名でありまず併夫は末期のこと這回は發端から綿密に講演せよとの注文でありますが其逆に人が產れぬ先からはゝ話も出來ますまい又其母が庚申の夜に妊娠したといふやうな陳腐い話てもありません謀叛人の後胤でもなし唯の下等社會に生れましたる男であります其頃江戸の葺屋町の劇場即ち市村宇左衛門の座で當時の劇場の

構造は現今とは違ひまして正面に鼠木戸と云ふ至つて細い入口がありました鼠木戸へ日々通勤をいたす木戸番二人其中の一人は和泉町に居宅を構へて居る虎右衛門といふ者老年に至る迄芝居者をいたして居りました其虎右衛門に子供が三人ありまして總領が此治郎吉でありますし異名鼠小僧其次は女の兒で此等のことは後に色々面白い話もありますが治郎吉は性來窃み心があつて佛者に云はせれば前世の宿業とでも申すのでありませう歟毎日のやうに正午時分になると親父の辨當を提げて來る其都度外の芝居者の所持品があくあるヤレ莨入がなくおつた所に置いた財布がない俺は紙入を取られたと毎日のやうに此苦情が起りまするスルト芝居者が甲「何うも氣の毒たが是は虎右衛門さん所の息子治郎坊の所業に違ひない子供の頑是あく珊瑚や何か

の緒〆の附いてるのが慾しさに取て往つたものであらふ　乙成程爾う云へはアノ子が來ると何日も何かなくあると言ふ此噂がパッと立ちましたから虎右衛門は芝居者に似合ず至つて正直な老人ゆへ　虎夫は何うも濟まない事でありますと爾う仰しやられて見ると私も少々心當りがありますから何れ皆様へは何とか御詫のいたしやうもありませうと云つて是から歸宅の後妻とも相談をして其頃の事でありますから治郎吉をば側近く招き生涯親子の縁を切り涙と共に勘當いたしました治郎吉は左のみ感じもあく一層親抔はない方が好い勝手次第に世間を遊び歩行いて思ひの儘に自由な事をして世渡りを仕やふと云たが癖とは云ひながら仕方のないものでありますは是から盛り場へ來たつては人の懐中を覗ひ終には惡賊の仲間入

をいたし江戸で「スリ」京大坂の方では「チボ」と云ふ一名を壹歌とも申す生馬の目を抜くとは彼の仕業でありませふ

其頃の盛り場と申せば両國、下谷、山下、采女ヶ原又は久保町、芝の切通し、深川八幡、淺草觀世音の境内、抔は始終老弱男女が群集する所此等は巷賊の最も御得意とする稼場でありますが昨日と送り今日と經過程に早くも次郎吉が十五歳終には此輩徒の頭分と仰がれるやうに相成次郎兄ィと立られるやうになりました

奸智は益々増長いたし度々不思議な事をいたして衆人の耳目を驚かせた事がありますが其中に最も著き話がありますが伯圓は決して美譚とは申せんか斯ういふ事がありますが

或一日次郎吉が仲間の小僧を三四人連れてブラリ〳〵と兩國邊を素見して來る丁度二三日好い仕事もなく懐の淋しい處から一

同次郎吉に向ひ　○「兄ィ此三四日のやうに暇じやアエンソウを附ることも出來ねへナ此エンソウを附る事が出來あいといふのは旨い飯を喰たり酒を飲んだりする事が出來あいと云ふ不平であります　○「今日は一ッ久振で軍雞の御馳走にでもなりてへもんだが兄ィ何か旨ェ工夫はありませんか　治「ナニ夫は手前達ばかりじやアねへ俺も二三日不獵で懐が淋しいが何うでィ一寸朝飯前の仕事儲少しやアあるが彼所の瀬戸物屋の老爺が座に付て居る傍にチョイと此所から見て六貫許の錢があるが彼錢を引浚ッて向兩國へ往つて軍鳥雞でも喰はうじやアねへか、云ふと外の小僧が　○「兄ィだが瀬戸物屋の老爺が眼張てゝ其側に積んである錢だから彼奴を取て來るてへのは此奴ア些と仕事が手重いにやアねへか　次「馬鹿ア言へまた俺に任して置け宜いか、ナ斯ふい

ふ工夫にしろと何か耳打をいたし突然次郎吉は瀬戸物屋の店へやつて來る尤も小さい床店ゆへ外に番頭小僧のやふなものも居あい老爺はヌツパリ賣物を並べ烟草を薫らせながら往來を眺めて居りまする所へ　次「ヲイ伯父さん此所にある瓶は幾らですイ老人「ハー　老人「ハー夫は本場だが五百に負けてやらふ朝口の商ひだからナ　治「伯父さん俺が買ふんあら五百でも買ふが主家のお内儀さんが梅干を漬るんだから買て來いと斯う吩咐つたんだが二百五十で買て來いて斯ういふのだよ伯父さん二百五十に負けて置いて呉ねへか　老人「馬鹿を云へ知らず半分値と云ふが何うして其瓶が二百五十ばかりで賣れるものか其下にある素燒の方なら三百だが夫は備前の本場なんだ到底二百五十には負からねへよ　治「其んな事を言はずに朝口だ

負けて置いておくれあ　老人「何ぼ子供だつて餘り馬鹿な事を云つたもんだ負られねへよ　治「伯父さん其んな事を言はずに負てをいてお呉れよ、サ茲へ錢を二百五十置いて行くからと端下錢をバラ〳〵と店頭へ投り出して息成その瓶を引出すから老爺は驚いて　老人「コレ〳〵持て往つちやア往けねへといふにまだ賣らふと云ひもしねへものをコレ小僧と其跡を追駈て來る丁度米澤町の角まで來る終に老爺に捕まつた　老人「途法もねへ小僧だ馬鹿あ二百五十許で何うして賣れるものか早く其瓶を返せ　治「伯父さん負けて置ねへな老人筬棒め之を二百五十許りで賣て堪るものか此方へ返しやアがれ散々小言を云つて瓶を取返し、老爺は元の所へ戻つて來ると斯は如何に積んで置いた錢が一文もない老人「イヤ是は大變だ彼奴のお陰で到頭六貫許の錢を取られちま

つたな當に酷い目に逢つたと弗々呟いて居た

此の方は趨つて其頃兩國に見せ物小屋の建列ねてありました、其莚張の蔭の處に治郎吉ブラりとやつて來る多勢の中間の奴等が

○「兄ィ旨く往きましたよお前さんは瓶を持て逃出す裡に錢を引ッ浚て來した　治「何だ旨く往たらふ幾ら錢があつた　○「兄ィ五貫でげした　治「ナニ此野郎俺の目を秘うと爾旨く往へね俺がヂロリ睨んだ目で六貫と定たんだ是ア手前達壹貫ピンと往やアがつたのよ根性の汚ねへ奴じやアねへか今殘ず喰ちまうのじやアねへか夫斗の錢を隠して何うするのだ本當に頼母しくねへ野郎じやアねへか　○「イエ全く五貫しきやアございませんよ　治「此野郎まだ強情を張つてるか俺の見た目に違ひがあるものか確に六貫だよ　○「ナニ五貫きやアありませんよ、ナー直公　直「夫は感公

の云ふ通り五貫きやアねへんで　治「ヨシ手前達が腹を合せて爾う云ふなら五貫あるか六貫だか俺ア往つて聽いて來らア　○「だッてお前さん瀬戸物屋へ往かれるもんですか　治「ナニ往けねへ奴があるもんか手前達にア往けめへが俺ア往けると大膽不敵治郎吉だ再び引返して彼の瀬戸物屋の店へやつて來て　治「伯父さんアノ瓶ば何うしても貧かりませんかテ　老人「又來やアがつた蒼蠅へ奴だ貧らねへあらアノ二百五十の錢を返してお呉れ爾うしないと吾倅が困るから　老人「持て往きやアがれ手前のお蔭で朝ッぱらから縁起でもねへ錢を六貫取られちまつた本當に手前は地震見たやうなものだ瀬戸物屋の爲めには災難だ　治「爾うかい夫はお氣の毒さま、云ひ棄て治郎吉は元の所へ引返して　治「何うだ取られた當人が六貫だといふ酷い奴だサ何所へ隠した、ッ

ミッタレる事をするれへ此行爲に一同の者は驚歎いたし彌々治郎吉を尊敬いたし終に巾着切の大棟梁と相成たといふ餘り面白もない御話で「譽れにもなりません。此んなものゝ大棟梁に成つても名譽といふ譯もありますまいが、先づ一寸しても好才の廻り方が此んなものであります、

其裡に治郎吉が十六才となる、時は文化の八年の事と、北の町奉行の代り目に當り、新役の事であるから、何か著しき改革令を出して市中の評判を取らふと、天下の御役人でも隨分名を賣たいものと見へまする、

此時江戸市中に散在する博徒無宿の破落戸其他盜賊と疑の掛つたもの殊更巾着切の類ひは悉く捕縛して罪の輕重を糺すといふ即ち無宿の勘込と云ふが奉行の代替りには必ずあることであり

ます然れば前述べました盛り場にて惡作をして歩行く畫鳶の奴等が此噂を聞くと均しく、近江近在へ逃出して江戸の地に居らないやふになりましたから、一時爾ういふ輩は地を拂つて無くなりましたが、治郎吉は素より大膽不敵の奴であるから、治「ナニイ手先や同心が縛らふとすれば先方も役目なればあそ鵜の目鷹の目、怠なく手配も仕やふが、此方も亦縛られめへと思へば乾度逃げて見せると其頃深川櫓下に買馴みの女郎があつたから、十六才の小僧の癖に其情婦の許で遊んで或朝のあと江戸向へ往つて一ト仕事仕やふと、永代橋をば頬被りをして橋の中央まで來ると、チロリと見た四十格好の町人体の男が　男「ヤイ、手前は治郎小僧ぢやアねへか、待て〳〵　治「ヘイ、是は誰方かと存じましたら馬喰町の親分さんで、何所へ　男「何所へ行かうと俺の

勝手だ如何にも俺は馬喰町の直吉だ、サ此両國界猥は俺の縄張中今迄は見遁がして置いたが、今日俺の目に掛つたらモウ仕方がねへ、小僧今日は往生して一番往つて來い手前はまだ一度も暗エ處へは往くめへ、巾着切の頭だと云はれて居たッて、まだ御牢内の様子も知らねへぢやア、手前何日迄も出世が出來ねへぞ、仕方がねへから一遍行つて來い、神冥にしろッへと忽ち懐中から細縄を取出しました　治「エヽ、親分私は決して逃げも隠れもいたしませぬ、此所で親分さんに御目に係つたのは全く不動様の御利益で、モウ仕方がございませんから往生します　直「笹棒め縛られるのに御利益てへことがあるものか　治「だッて縛の縄てへことがあります　直「口の減らねへ子僧だ、手前も馬喰町の直吉の手で御縄に掛れば本望だらふ　治「へイ、切望御手柔かにお願ひ申やす、唐突直

吉が治郎吉に縄を掛やふとする、此時早く彼時遅く、永代橋の欄干へ飛鳥の如く躍上り、アレと云ふ間に渦巻き渡る所の水中へサッと飛込ましたアッと直吉は口惜しさふに水面を睨み詰て居た往來の人々が此体を見て　○「イヤー治郎子供に逃げられた、弘法にも筆の誤りと云ふのは此事だ、抔と口々に云はれたから、直吉面目あげに高尾茶屋の方へと逃出しました、

さて治郎吉に於ては永代橋より水中を潜つて佃島へ這上りましたて、是から甲州街道へ差掛るといふ有名なる小佛峠の雪中、旅賊に出逢の一條は第二回に委しく辨じます

第二席

治郎吉は水中を潜りて永代より佃島へ上り如何ある所に潜伏して居たか、日の暮るを待てトある漁夫の家の明巣を覗ひ、自分相

の衣類を窃取り、之を着用なして姿を變へ、僅ばかりの端下錢を懐中し　治「此樣子では暫く江戸の土地をば足を拔いて京大坂から四國九州の方へ立廻り、一ト修行して立派な男に成て故郷に歸らふと決心をなしたが、東海道は人目も多く且つ箱根の關所といふ難所のあることを知つて居るから、内藤新宿から甲州街道へと志して其間は木賃宿に泊り、僅に冷やかなる夢を結んで、丁度江戸を出離れて第二日目八王子より三里ある小佛峠へ差掛りました當今でさへナカ〳〵の難道であります、其頃はホンの一人立の往來、辛うじて漸く峠へ來たりし頃は十二月の初旬、雨三日催ふして居た雪が次第に降來たり、見る〳〵裡に往來は銀世界流石の治郎吉も寒氣に堪かねて一歩の歩みも心に任せぬやうになりましたから、困り果て不圖傍を見ると旅人雨宿りの爲めに設けてある地藏

堂かありましたから、其地藏堂へ飛上つた、けれども焚火を仕やふとするには火打道具はなし、何うする事も出來ず、據ろなく賽錢箱の蔭に小さく成て齒を喰締め、かた〳〵震へて居た、何うかして眠らんとすれども隙間漏る雪風の肌を通し、眠れぬ儘にマヂリ〳〵として居ると、丁度其日の薄暮頃、雪は彌々強く降しきる、野も山も皆白妙の世界と成た程こそあれ、此辻堂を目的にして三名ばかりの旅人が來たるやうす、治郎吉は貌はも息を殺して賽錢箱の影から見て居ると　甲「やれ〳〵何しろまア火でも焚かなきア蘇生へる事が出來ねへ、手前火打道具を持つて居るか　乙「オヲと合點だ火打道具も早附木も用意して來た　甲「本當に手前は殷念な男だ伊之助「エ手前枯木でも集めて來い　丙「ウム、合點だ、と一人が森の中へ這入まして成たけ濡れぬ枯枝や何かを拾つて來る、然う斯う

する裡に焚火が出來て、グルッ三人が周回を取卷き　甲「ヤ、好い心持だ、もつとドン〳〵べろ、搗ふ事はねへから、其辻堂の格子を引つ外して焚け　丙「待て〳〵地堂さまだか何だか知らねへが、其逆其んな事も出來めへ、サ茲に松の枯枝があるから此奴をくべやふと彌々焚は盛んに成て來る　丙「ア、是で些と人心地が附いて來た、コー時にまア早く配當をしちまつねへと、各自に氣が沈着かねへ、俺の目で確か三四十兩と思つたが、まア茲へ胴卷を出せ、と云ふと一人が　乙「サア目ッ張あで中の金を配當仕やふと昔床しき唐更紗、甲斐絹の裏が附いて居る胴卷、蛙を呑んだ蛇のやふに固まつて居るのを取出し、中から金を搾出すを鄭嘲に反古紙に包んだ小粒、即ち一歩銀が十兩、小判が十兩、又小粒が十兩と都合三包。　甲「オヽ櫨九郎　櫨「ナニ　甲「三人で分けろとチャンと銘々に包んで

あらア、何れでも勝手の好い方にしろィ　櫨「爾うかナ、夫しやア俺は此小判に仕やふ使ひでかあつて宜いから　乙「俺は仕まつて置くんだから小判の方が宜いや　甲「此野郎餘り仕まつて置く風でもあるめへ、ぢやア伊之助は小判にしろ、そまで此仕事は俺が發見たのだから俺に此胴卷を餘祿に呉ろ　乙「勝手にしろう、だが其んな物を持ていて足でも附かねへやふにしろ　甲「何の其んな氣遣ひがあるものか、と小粒を拾兩胴卷の中へ押込んで懐中へ捻り込む、抑も此三人は何者であるかと云ふに甲州街道にて有名の旅賊にて異名を月の輪の熊藏、かまいたちの伊之助、釣鐘の櫨九郎と嚇名を名乘る奴、一寸外見は旅商人、糸買でもあらふかといふやふな顔をして多くの旅人を惱ますといふ曲者であります、銘々拾兩つゝの金を懐中に納め、造化精妙と笑を含んで櫨九郎は　櫨「ヤイお

前達は何と思ふかア知らねへが、考へれア今日の仕事は隨分可哀さふだつたな、アノ六部と巡禮の親子は通常の者じやアないぜ、何でも能く生活た人の末で、何ういふ理由だか知らねへが親父は六部娘は巡禮、二人連にて此雪の降る中を承知で小佛峠へ差掛り、今夜は關野へでも往つて泊まらふといふ了見たらうが、大變に助けて呉れと掌を合せて拜んだが、喉首を締るも鵜飼の商賣、慈悲があつちやア仕事は出來ず、仕方がねへから六部を縊り殺し金を奪つて谷底へ突落し、まア雑物だけは助けてやつたがまたしもの偽慈悲だ　熊「ホンに權九の云ふ通り俺は又アノ巡禮の小娘だが、彼奴がモウ一ッ二ッ年齢を取てると唯置く代物じやアねへんだが惜しい事をしたよ、夫に伊之助の野郎め、また十二三であらうが親父は殺して仕まつても此娘は何うかしてへもたんだと吐しやアがつたから、娘も慈いて此上三人に念佛講でも始められちやア堪らねへと思つたのか、親父を突落した谷底へ我と我身を踊らして潔く陷つて仕まつたが、アヽ思へば惜い蕾の花を散らして仕まつたナ　巡禮とあり日に焦けて形は窶れても好い娘だつたナ　伊「本統によ、モウ二三年經過て見ろイ、大名道具だぜ、無慈悲な事をしちまつたッけナ　熊「夫じやア伊之助今ッから谷底へ往つて助けて來やアあ　伊「馬鹿な事を云ふ、ない夫は爾うと死んだ巡禮の娘の事抔を想はねへで是から何うだイ駒木野の宿へ往つても別に泊らふと云宿屋もあし、殊には此峠で仕事をして直に北藏へ泊るのは何だか氣谷めがするやふたから一層のみと三里延して八玉子へ往つて、餘り人の知らねへ旅籠屋を見附て、其家へ御身腰を落着け緩くり腹の中から暖まつて、爾うして何うだイ、久振の僥倖だから

飯盛でも呼んで一ト騒ぎやらかして、面白く遊ばうじやアねへか　權「勿論其事あらば俺も大承知だ、就いちやア何所が宜からふ　伊「爾うよナ、八王子の宿では鎧利鎧屋あら極上だが、彼所は餘り繁昌して泊客が多いから、爾うでもねへ万一また足でも附いちやア詰らねへから山上みナ　熊「コー〳〵ある〳〵　横山町の方へ行くと那處に河内屋と云ふ新店がある、此間迄亭主が問屋場に出て居たのが今度旅籠屋を始めたのだが、大暦客人を大事に取扱ふと云ふ評判だ、アいふのあら此方等の顔も知るめへから、彼家へ行つて一番我儘を言つて泊込まうせ　權「夫じやア爾ういふ事に仕やふと三人絃に組ぼ相談も整ひましたものと見へて、是から東の方に向つて峠を下ちふとする、

姑終の樣子を格子の中にて聽いて居た治郎吉が胸に問ひ腹に答へて莞爾笑ひ　治「ヨシ、彼奴等三人の泊る所は八王子の横山宿河内屋だと斯う吐しやアがつたナ、此奴一ト仕事してやらふ、と腹を据へ、三人が峠を下つて行く跡から己も辻堂を飛出し、跡を慕ふて來るとは知らぬ高調子、世間搏はぬ山路を話して行く後から　治「オーイオーイ若し少し待てお呉んあさいましよ、熊藏が後を振反り　熊「待ねへ、誰か呼ぶじやアねへか　權「何だ〳〵　熊「何だか小さな小僧が……　河童小僧見たやふだな、ヤイ小僧手前は何だ　治「アヽお前さん方は那方からお出あさいました　熊「俺達か、俺達は西の方より來たのよ　治「夫じやア吉野の方から此方へお出なつたのでございますか　熊「爾うよ、シテ手前は何だ　治「アヽ私は主人に失見ました小僧でございますが此通り日は暮かゝつて來まするし、山道で雪は降ますし、何うとも仕方がございませんから

彼方へ此方へとマゴ〳〵して居りましたが、往來は少しもなし、困切て居る所へお前さん方の後影が見へましたから一生懸命に後から追蒐て來ましたのでございます　熊「ウム、俺達三人の影が見へたから追蒐けて來たんだと　治「イヘイ　熊「爾うして手前は何だ治「エヽ私は何を隠しませふ江戸の淺草の土富棚と云ふ所た妙蓮寺といふ日蓮宗の御寺があります、其妙蓮寺の和尚樣が今度御本山の身延へ行くといふので御供をして參りました小僧でございます、所が不圖和尚樣を見失ひまして、那方へ入らしつたか蹤張知れません　熊「知れねヘッて箆棒め、一ト節道じやアねへか、何う見失つたのだ　治「イヱ夫が和尚樣か用を達したいが山道で便所がないから、杜の蔭へ這入て用を達して居る裡手前往來で見張て居ろと斯う仰しやいますから、私は其通りチャンと見張て居ります

ると何時まで經過ても出てお出でなさいません餘り長いから私が聲を枯らして和尚樣〳〵と呼んでも夫切影も形も見へません其裡に日は暮かゝりまするし、万一狸狼にでも喰はれて仕まつたのではあるまいかと、途法に暮て居りましたのでございます　熊「アヽ爾うか、夫じやア手前の考へ通り殊に寄ると和尚は狸狼に喰はれたかも知れねへが、夫にしても泣聲位は聞へさうなものだな手前是から何うする積りなんだ　治「私は何うする事も出來ませんから、今夜は何家へ泊つて、明朝人を頼んで此山中探して貰はうと思ひます、夫とも和尚樣は御一人で身延山へお出にありましたか、何しろ此頃の雪では何する事も出來ませんので　熊「ウヽ成程夫は困つたろふナ、ぢやアまア此方かねへ是からナ此峠を下ると駒木村といふ村宿があらア所へ往つて旅籠屋へ頼んで泊て貰

ふが宜いや、あア今ッから外に仕方がねへ、雪の中に凍へて立往生をして居たッて仕方がねへから　治「ヘイ有難うございます貴郎方は何所へお泊んなさいます　熊「俺達はモウ三里も歩行いて八王子へ泊るのだ　治「夫では私も淋しくッて往けませんから、切望其八王子とやらまで一緒にお連れなすつては下さいませんか、旅籠賃は貴郎方の分まで私しが出しますから　熊「爾うか、夫アまア一緒に行つても宜いが子供の事だから少しも早く泊つた方が宜からう　治「イエ私はお金を持て居りますから、若し此お金を取られた日にア自分の命を取られるより和尚様に對して濟みませんから、三人は互に顔を見合せて　熊「ナニ手前ェ金を持て居る、ウム幾ら持て居るのだ　治「アノ和尚様からお預り申たお金が胴卷に這入て居ります、和尚様の仰しやるには、俺が持て居ると、金は直に

他人の目に附く殊更道中には旅賊抔といふものが鵜の目鷹の目活馬の目を抜くから子供が持て居れば人の氣が附かぬから、手前の腹に卷いて置けと申ました、そこで私は肌身放さず、縱令命を取られても此金ばかりは放しません　熊「ウム、幾らばかり持て居るのだ　治「お金が五六十両ありませふ　熊「ナニ五六十兩ウ……と云はず語らず三人が莞爾笑つて　熊「ウム爾うか、夫は定めし心配であらう夫じやア成程貴樣だッて一人で旅籠屋抔へ泊るのは危險だ、ちやア俺達と一緒に八王子まで往つて泊れ、伯父さん達が一緒に連れてつてやらう　治「ヘイ有難う存じます、切望伯父さん爾う願ひます、旅籠錢は皆私が出しますから　熊「ナニ旅籠錢抔は何うでも宜い、小僧一人位は何でもないから一緒に來い　治「ヘイ何うも有難う存じます一〇「夜が明けたら宿役人でも頼んで人足を

雇ひ、此山の近所を殘らず探して貰ふが宜い、殊に寄ると和尚は身延へ一人て行つちまつたかも知れねへせ　治「私も爾う考へます のでございます　熊「けれども是から甲州の身延へ行く道はナカ〳〵難澁だから、幾ら急いだッて爾う早くは往かれねへ、まア八王子へ着いて人でも頼めば又何うにでもなるからまア〳〵安心し て居ろィ　治「ヘィ有難う御ざいます、

彼此する裡に晦を下りましたが、其途中にて彼の小僧を締て仕舞へ抔と言出した奴もあつたがイヤ〳〵六部と云ひ巡禮と云ひ二人まで殺して罪を造つたから、其上に又小僧まで其んな酷いことをせずとも金さへ此方へ卷上げて仕舞へば宜いのだ、八王子の河内屋へ泊つて子供の事だから酒は飲むまいが餅でもドッチリ喰はして氣が重く成て眠入はあを仕事を仕やふとの相談内々一決して、來るとはあしに駒木野の宿も通越と、雪は益々强くなる、中ム八王子宿へ追入り、千人同心の組屋敷を通越し程なく來たる横山宿、左側の河内屋彦兵衛方へ着いたのは其夜の五つ過ぎ(當今の午後九時頃)モウ河内屋の家でも景氣に行燈は点けて置くやふのも、此大雪では泊客もあるまい、四つを打たら店を締やふと、主人夫婦は勉强家と見へて　主人「エ、御泊りではございませんか貴郎方は御泊りではございませんか、まだお湯も奇麗でございます貴郎方お泊りではおざいませんか、子僧諸共四人連、雪を拂つて夫へズッと追入り　權「小哥どもを切盗お泊めなすつてお呉んなさい　主人「ヘィ夫れは何うも有難う存じます、サ何うぞお昇んあさいまし、コレお竹や御洗足を早く持て來あ、お湯を熱くして……ェ、お四人さまで入らつしやいますか、今日は那方さまから　權「ア

イ、吉野の方から參りやした　主人「左樣でございますか、此雪では嘸かし御道中は御難澁で居らつしやいましたらう　權「何うも此通りの吹雪ゆへ漸ともすれば谷底へ吹落されるかと思ひやしたよ　主人「左樣でございましたらう、ヘイ宜しうおざいます、御合羽は私の方で乾して置ます、サ何うぞお昇り下さいまし、アヽ七番へ御案内申すが宜からふ、と是から下女が案内をして十畳ばかりの座旅へ通しました　下婢「エヽ貴郎方は御都合に寄ましてお風呂は如何でございます　權「其奴ア有難エな、下婢「お二人ッヽ入らしアても宜しうございます　伊「爾うかイ、と是から風呂へ這入つて居る裡に膳部が出る　權「若し姐さん何でも好いから別にお肴を一種拵へてお酒を熱くして一本　下婢「ハイ畏りましてございます、別に何もございませんが、鳥鍋のやふなもので　權「鳥鍋は結

構だ是れから三人車座に成て酒を飲みながら　熊「アヽ子僧さんお前の名は何て云んだ　治「ヘイ私は與吉と申します　熊「與吉さんか、好い子僧だ、幾才だ　治「エヽ、私は十四でございます　熊「十四ハヽー、何うも怜悧さふな子僧さんだナ、江戸ッ子だらふ　治「ヘエ江戸ッ子でおざいます　熊「何所の生れだ　治「私は淺草でございます　熊「爾うかい、寺抔へ奉公して終にア坊主にでもなるのか　治「ヘイ左樣でおざいます　熊「止しねへ坊主なんさア詰らねへから役者になんねへ、爾うして情婦でも拵へろ　治「ヘイ有難う存します　熊「お前酒でも飲まねへが　治「イエ私はお酒は些とも飲めません　熊「酒か厭なら、餅でも何でも喰なものを喰つて早く横に成て明朝早く起て和尚樣の行衛を探すが宜い　治「ヘイ有難う存します　熊「夫は爾うと其大事おものを何うだい、大人の俺達に預け

て置いた方が宜からふ　治「イヱ何ういたしまして何んあ事があ
りましても此お金は放しません私が殺されて死んぢまへば仕方
がございませんが活て居る裡は決して放しません　熊「爾うか、ぢ
やア大事に仕舞つて置くが宜い、
其頃の事ゆへ別に宿帳を附けるといふ蒼蠅いみともあく彼此す
る裡に夜が更けましたから一同枕に就く、三人の奴は頻に子僧の
懐中に目を着け眠入たら仕事を仕やふと思つて居る子僧の方で
は三人の懐へ目を着けて居る、其裡に三人は疲労、殊に銘々酒
の一合つゝも飲んだから枕を外して高鼾、グー、グッと眠込んで仕
舞ひました、
小夜更けて雪は益々強く、深々といたして吹雪の音ザー、サッとい
ふ、八王子といふ所は随分寒氣の強い地でございます、けれども三

人は酒のために前後忘却眠入ばあ、彼此する裡に八ッの鐘がボー
〳〵と告渡る家内寂寞と眠静まつて仕舞つた時分、子僧はソッと
起上り、抜足差足に廊下へ立出、店の方へ往かうとする納戸の所に
一人宿直と云ふも大仰だが、夜明しをして居る年端の下女か、炭火
に烘りながら芋を紡んで居た、ミシり〳〵と音のするのに氣か附
いて　下女「誰方ェ……誰方でございます　治「ハイ私で、アノ女中
さん旦那様の寐て居らしやる所は那方で　下女「ハイ當家の旦那
でおざいますか何の御用　治「ハイ大變な事が出來ましたので、私
の懐中にあつたお金を皆お取られて仕舞いましたから、旦那様に
御目に掛つて取返して頂かうと思ひますので　下女「夫はまア大
變で　治「お前さん其んなに大きお聲をなすつちやア往けません
取た人が奥に居るんですから　下女「成程、ぢやア此方へお出あさ

いましねと彼の下女が子僧を連れて主人夫婦の寢所へ參つて

下女「旦那様〳〵　主人「アイよ何だ　下女「アノー七番へお寢かし申た四人連の中のお子僧さんがお金を取られ、取た人が脇に居る逃げると往けないと仰しやいますからお連れ申て來ましたと云と主人の彦兵衛は瓦破と跳起て　主人「何ですと、サアまアあト へお這入んなさい、お前が金を取られたのか、お前は子供衆の癖にお金を持て居あさるのか　治「ハイ何を隠しませう、私は江戸淺草の土宮柳の日蓮宗蓮妙寺の和尚様の御供をして來た子僧でございますが、昨日小佛峠で和尚様に失見れ、日は暮れますから途法に暮れて居る所へアノ三人の方が辻堂から出て、俺と一緒に今夜八王子へ往つて泊れ、明朝和尚様の行衛を探してやるから、と斯う仰しやいますゆへ夫から御一緒に參りましした私の懐中に金を持て

居る事を何うして知つてましたか、其金を此方へ預けなさ〳〵と仰しやいましたが此お金は死んでも預けられないと斯う申ますと此方でお酒を飲みなさいから、私にお酒を飲め〳〵と云ふのです、私はお酒は厭だと云つたら、餅を喰へ爾うして早く眠ろと云いますから眠ちまいまして今小便に往かふと思つて見ると、懐中に有つた胴巻がございませんが、何う考へてもアノ人々が取つたに違ひございませんけれども敵手は三人私は一人、迂濶り騒きてもしたら掴み殺されちまうかも知れませんが、何うぞ貴公様の御威光を以ちまして取返して下さるやふにお願ひ申ます、切望今の中に早く願いたう存じます　彦「夫は頓でもない事だ、成程和尚様が自分で持て居ちやア人の目に着くから子供衆に、成程、是は随分あるあとだソコで其金は幾らですエ金高は　治「ハイ確か三十兩で　彦「三十

雨、ウム、何か其金に目標でもありますかい夫ともお前さん中まで氣は附くまいチ　治「イエ和尚様が反古紙に包みまして小粒で十雨、又小粒で十雨、外に小判が十両併せて三十雨でございます　彦「成程其胴巻かチ　治「ハイ、　彦「其胴巻に目標でもありますか　治「ハイ、更紗の古い布片で裏には鼠甲斐絹が附いて居ります　彦「アヨシ〳〵、爾う確かり分つてるなら大丈夫だ、若し彼奴等が夫を持て居れはお前さんの物に違ひあいから是から一應吟味をして上げやふコレお竹や静かに若い者を起して宜いか、夫から裏表の締を確りして　竹「ハイ畏りました、

是から店に寝て居た若い者番頭風呂番に至るまで殘らず起ました、此家の亭主は元問屋場に出て居つたものゆへ「八王子横山宿」と記した御用提灯を点けて、是から彼の三人の旅賊に迫るといふ面

白き手柳は次回に委しく申上げません、

第三席

是は其頃はいの宿屋の定法と見へて、宿の主人が先に立ちして總て旅客の座敷へは一々徐に開けて　彦「エヽ御免下さいまし、御免下さいまし、御客様賊に御迷惑でございませうが、一寸御目覺を願ひます、若し御客様と眠入端を起された旅人が　○「ハイ何でございます、何の御用です　彦「イエ外の事ではおざいませんが、何うも皆様の御迷惑ではございませうが、今晩私方へ泊り合せた御小僧さんでございます御主人からお預りの金を一寸眠つて居る裡に取られたと云ふことですが、決して貴所方をお疑ぐり申す譯ではおざいませんが宿の定法、宿屋の掟でおざいますから、一寸お荷物御懐中物を一ト通御改め申ます切望之へお出し下さいますやう

に甚だ恐入ますが、旅客は之を聞いて　客「ニ何だとへ、夫じやあ同宿の御方が金を取られて、私共の荷物や懐中物を改めると斯う仰しやるのですか、夫はモウお改め下せへやしても仕方もねへが吾儕は御覽の通り田舍漢でがす、是迄一度も他人に嫌疑を受けた事あんざあねへ身体です、些とハヤ大きな申分じやアあるが、日光街道の下瀬の在では代々ハア名主ノウ勤めて居りやす、何かあると御地頭様の御用人の末席に列ありやして御地頭から御盃ノウ戴きやす苗字帶刀御免の家柄でござりやす、今迄ハヤ他人様の物を塵ッ葉一本掠めた事もあければ嫌疑を蒙つたみともおざりやせん今度此近在まで據ろねへ用向があつて來てお前の所へ泊つたが、吾儕がノ不祥でがす本當にハヤ嫌疑を受けやして八王子の旅籠屋で調べを受けたと云はれちやア吾儕ア此儘國へは歸れやせ

ん、第一御地頭様に對して濟ます先祖の御位牌に對して不孝になりやすから、まア御免を蒙りやしやうね　客「夫はまア一應御道理でおざいますか何も貴所をお疑い申た譯ではございません、是は宿屋の定法でおざいます、夫ゆへ疑ひましたのでチョッとお見せ下さいますれば夫で宜しいので　客「見せれば宜い、失禮千万ナ併し宿屋の定法とあつちやア仕方がねへから見せもしべいが能く眼珠ア押開いて見て下せへ、サ此柳行李の中にある是は手帳、是は矢立、古足袋と宜うがすか是は胴卷です、此胴卷の中には金が七兩ペイ這入て居やす、此革財布の中には二貫ペイの小遣が這入て居るでがす、煙草入に着替が二枚胴着に繻袢、股引、脚半、合羽と脇差が一本、笠に草鞋はお前の方に預けてあるだ、是で嫌疑が晴れやしたか、人を馬鹿にして居る、折角好い心持に眠つた處を何てへおとだ

彦「誠に何ども恐入まして御ざいます、何れ又明日御詫をいたします　客「途法もねへ男だ、駄目野郎めと獨で腹を立て寝て仕舞ひました、

さて其頃の座敷へ來ると、モウ疲に目を覺まして居たものと見へて、江戸ッ子の一人旅　○「エヽ分りやした、何でげすかイ、泊り合せた客人が盗人に金を取られたので、客の掟、宿屋の定法とか云ふのでお荷物御懐中を改めると斯う云ふのでげせふ　彦「エヘヽ、伊承知あらん夫迄の事で切望一應御迷惑あがら……　○「今隣室の客人が頻に文句を並べて居なすつたが成程夫ア御荷物や懐中物のある人は理屈も云ふだらう小哥の方は何も無いのだから理屈を云ふ事が出來ねへんです、御亭主さん御推量下せへまし、スッテンテンック天狗の面てへのは小哥の事で　彦「エヽ、何と仰しやいます　○「ナニテ、何も持て居ねへのだから、持て居ねへものを改めると云ふ譯にア往きますめへ、エヘヽ、日光の電神で着た形(北鳴)てへんで、是じやア到底改める譯には往きやすめへ　彦「ヘエー、併し何か……　○「何にッて何にも無へんで　彦「行李が一個でございまし

たやふで　○「ナニチ是は行李の一個も持て歩行かねへと幅が利かねへし、何所の旅籠屋でも好い顔をして泊めて呉ねへから此んなものを持て歩行くんだが、實に何も無いんでけす　彦「夫ア何うも餘り無さ過ぎますする　○「無さ過ぎても何でも是切あんで　彦「併し錢入お紙入のやふなものでも……　○「其んなものがあれば心配しやアしませんが一文あしの唐ッけつあんで、江戸ッ子の往大名の還乞食といふのだ、友達と一緒に伊勢參宮を仕やしたが途中で友達に撒れちまひ、仕方がねへから中州街道へ彷徨つて乞

食同様身延山へやつと参詣をして甲府へ出ると久しく逢はねへ友達に出會したから漸う泣付いて催ばかりの端下錢を借て江戸の方へ返つて來やした其途中で錢も皆使ひ果して困まつちめへやしたが、新店で河内屋さんの旦那は大變に氣前が好い慈悲深い方だと聽いたから、理由を話申たら御勘辨下さるのだらふと昨夕宿へ紛れ込みやしたか、まだ新しいお湯にも入れてお呉んなさるし、結好なお膳でお飯も澤山喫させてお呉んあすつて誠に有難うおぜへやした、けれども今云ふ通りの始末で一文あしの唐ッけつ烟草を買ふ錢もねへ仕宜でけすから、何うかまァ宜しく御推量を願エます、仁心深エ旦那だてへあとゆへ御哀憐の御沙汰を願ひたいもので　彦「ヘエー、夫じやア貴郎何ですか、本當に一文も……

○「ある位から其んな見ッ共ねへことを云やアしませんが、右の仕

末ゆへ明朝に成たらお慈悲を願つて、ドウか誤魔化さうと思つて彦「誤魔化されちやア大變です、厄介な御方が泊つたものですあ

○「エヘヽ、是ても神田ッ子で、水道の水を喰つて育た男てさア　彦「餘り御自慢になりませんよ、夫ては何うも仕方がない、爾ういふ御客樣では改めるにも及びますまい、と此所を立出で段々に改めて來ますと、

スルト彼の伊之助、權九郎、熊藏の三人が目を覺まして　權「オヽ、伊之助　伊「エヽ　權「聽いたか　伊「聽いた、小僧が居ねへじやアねへか　熊「ウム小僧が居ねへ、何だか訝な事を云つて歩行て居るぜ、泊り合せた小僧さんが金を取られたから御荷物御懐中物を念のために改めるんだとよ、見やヽ　御用提灯を点けて大勢手に〳〵六尺棒抔を持て跡から附いて來る奴がある　熊「待て〳〵茲の家の

亭主は元宿役人を勤めたから亭主め異う御用風を吹かせやアがる　權夫は爾うと乃公等三人かチョロリと眠つた暇に、誰か小僧のものを占領た奴があると見へるな、上手の手からも水か漏るたア此事だ、到頭先を乘ッ込された、忌々しい事にあればあるものだな、

云つて居る所へドロ〳〵と這入つて來た、瑞ては此所と目を着て居るのであるから、亭主は一層嚴重に　彦「ハイ御免よ、一寸目を覺ましてお呉んなせへ、皆さん起きてお呉んなせへ　權「アイ皆起きて居ますよ　彦「扨さて居るあら开所に皆揃つてお呉んなせへまし、今まで罪もない御方の眠入ばなを遮すのも是は掟だから仕方あるまに此所までやつて來たんだ、お前方三人と先から極まつて居んだ、モッ愚圖々々何も云ふにア及ばねへから金を茲へ出して仕舞ひなせへ、爾うすりやア又隱便に取計つてやりやうもあるサア足元の明るい中にキリ〳〵金を茲へ出せ　權「おら〳〵御亭主大業な事を言ひなさんな何てへものゝ云ひやふだ、何でイ痩ても枯ても此方等は御客樣だ、お前は旅籠屋の亭主じやアねへか　彦「やかましい、泊まつて貰つて旅籠錢を取らふと思ふから御客人だ貴樣達見たやふな人物を泊めたのは此方の目鋭違ひだ、俺の家は新店と馬鹿にして此河内屋彦兵衛は旅籠屋の方じやア顏は新しいが街道の馬屎風に吹かれて間屋場の高い所に居て往來の人に目を配つて、此奴ア眞面目な面アしてエても稼人が、旦那と見へる遊人か、誤魔化し者か旅賊か其んな事に氣の附かねへ俺だと思ふか、今夜の吹雪に紛れ込んで來やアがつて、何うも錢の使ひッ振の荒エ野郎だと思つたが、果せる哉此始末、サ此子僧さんの金を卷揚

げた丈殘らず茲へ出せ此野郎モウ愚圖々々仕やアがつたッて仕様がねへ、俺を誰だと思ふ、八王子宿で御用を勤めた河内屋彦兵衛だ、と天川屋を氣取て巾を利かせる、忌々しいとは思つたが、仕方がございませんから　權「オヽ御亭主成程お前の言ふ通り、此方等は何も白きてうめんの眞面目な旅人じやアねへ、げれども子僧の物抔を取た覺はありやアしねへ　彦「エヽ與太郎、長吉、甚三此奴等三人を搦う事はねへから开所へ引据へて仕まへ爲うして懷中を改めろ　○「エヽ宜うがす、と是からして四人ばかりの荒呉男が右の三名を取て押へ、懷中へ手を入れて引摺出した胴卷、財布、逆さに振つて改めれば小判が拾兩、小粒が十兩、又小粒が拾兩出た　彦「ウム成程チヨイと子僧さん是れですか　治「へイ旦那御覽下さいまし、裏には甲斐絹が附いて居りまして表は更紗の古いので　彦「

同う〳〵夫に違ひない　治「お金は小判が十兩、小粒か十兩ッヽ殘らず反古包で　彦「ウン〳〵お前の言ふ通だ、宜しい夫じやア此金は吾儕かお預申て置くよ、本當に手前達は頓てもねへ害生だ、此奴等に旨いことを言つて、小佛峠で旦那に失見れてマゴついて居る子僧さんを俺の家へ連れて來て飲めもしねへ酒を飲ましたり、餅を喰はしたりして寐ろ〳〵ッて何うするか見ろ、盜人猛々しいア汝等の事だ、今酷い目に逢はしてやるから覺悟をしろ　權「モシ〳〵御亭主〳〵、一寸申上げますが夫はお前さん一徹に、此子僧の言ふ事はかりを聽いて居るから其んな事を云ひなさるが、是は此子僧の金じやアねへんです、現に子僧は五六十兩持居ると云ひやした　彦「エイ何を吐しやアかるのだ此奴等ア　權「其金は實ア……

……と云はうとしたが明白地に金の出所を云へば六部を縊死し

巡禮の娘を谷へ突落した事を云はゐければならず、爾うすると一人のみかは二人まで殺した重罪と氣が附いたから、眼前子僧に旨く謀られたとは思ひましたが、夫と事實を述べることが出來ず、モヂ〳〵しあから　權「ダ、旦那其子僧もナカ〳〵一ト通の奴じやアねへから油斷をしちやァ往けませんよ　彦「馬鹿ア云へ、正直の頭に神宿るたァ此事だ　熊「御亭主何が正直てもんてすか　治「旦那此奴等は私の金を取て置ながらアンな事を云つて居ます　彦「宜いよ〳〵決して心配には及ばない、アハヽヽ途法もねへ奴だ、若い者此奴等は面へ鍋墨ても塗つて叩出してやらふと思ふが餘り大膽不敵ので愛想が尽きたから緊縛して仕舞へ　若「エヽ宜しうございます　彦「中庭の松の木へ踏ん縛り付けて三日許何も喰はせずに立いて、三日も經過たら足腰の利かねへやふに毆打めして、宿

外れから追ッ放すか其裡に役人衆でもお出あすつたら引渡して仕まうから兎に角松の木へ縛つて置け　權「オヤ〳〵酷い事におれはなるものだナ　若「サア此方へ來やアかれと引摺つて參り、中庭の松の木へ高手小手に縛り付けて仕舞つたから何うするみとも出來ない　彦「サア〳〵子僧さんモウ安心だ、お前は土富棚の蓮妙寺のお子僧さんで、爾うですか、宜しい〳〵、與吉さんと云ひなさるか　與「ヘイ、旦那樣又泥棒に取られると往けませんから、切望此お金は明朝まで貴公の方へお發りなさつて　彦「ヨシ〳〵、吾儕が頭つたら大丈夫だ、皆さまに御苦勞だつた、腹が空つたらふ、餡餅でも喰つたが宜い　若「ヘイ有難うございます、と是から店の若い者を皆寢かして仕舞ふ　治「アノ旦那機切望今夜は貴公のお側へそ寢かしあすて　彦「ア、其方が宜い、〳〵可愛さふに、此方へお出と

己の寢間へ連て來て寢かした、

スルと丁度明七ツの鐘がゴウ〳〵と告渡る頃ソッと起上つた治郎吉が厠へ參り、手を洗ふ振をして樣側の雨戸を一枚がラリと開けると三人は凍へ切つてブル〳〵震へて居る　熊「伊之助何うも間が悪いナ　伊「ウム何うも此んな不出來な事はねへぜ、手はれねへもんだ、俺ア丁度二十五の厄年だ　權「ウム、伊之は二十五にあるか、成程厄年だナ　伊「權九兄イは幾才だ　權「俺ア四十一だ　伊「前厄だナ熊公は幾才だ　熊「俺ア三十三の厄年よ　伊「婦人じやアあるめへし、男に三十三てへことがあるものか　伊「近年は男でも三十三の飛ばッチリが些たア來るよ、夫にしてもアノ子僧だらふ　熊「本當によ、何だか理由が分らねへナ、狗骨折て鷹の餌食たア此事だ酷い目に逢へば遇ふものだナ、治郎吉は樣側に立て　治「オイ伯

父さん面白いぞア　權「エー……此子僧面白いたア何の事だ人を此んな目に逢はしやアがつて　治「樣ア見ろ、御亭主の云ふ通り正直の頭に神宿るとは此事だ、天道樣の調合て、お前等にア備はらねへ金おんて、チャンと此お小僧さんの懷中へ這入るやうに出來て居るんだアハヽヽ、コレお前方はまだ仕事の仕方が青いぜ、是からモウ些と仕事を器用にするか宜い、俺ア江戸の兩國で人にも知られた治郎吉小僧といふズッと堅氣な正直の兄イさんだ、是から天の與へた三十兩の金を路用として志指す方は東海道から上方筋何れ又日本の中てお前達に邂逅ふこともあらうから、夫迄にお前達も十分腕前を上げていて呉れ、年ばかり重ねやアがつて何といふ樣だ、俺の唾液でも舐るが宜いぜ、惡い事を仕やアがつて、罪も報ひもねへ六部や巡禮を殺して谷底へ突落したりして、併し他人の

事だから仇討をするにも及ばねへ、命丈は助けてやるが、俺の唾液でも舐てモウ些と怜悧になれッ、と三人の横ッ面へ唾を吐かけた治モウ一ト修行しろイ　横エ、忌々しい事を吐かすな、畜生ッ、と切歯をしたが仕方がございません、

爾う斯うする裡に夜が明けますると、治郎吉は亭主には禮を述べ昨夜の旅籠錢を拂ひ三人ばかり男衆を頼んで和尚様のお行衛を探したいと云ふ、亭主は外ならぬ事でございますから、家の若い者二三人を附けてやると峠へ登かけた駒木野の宿右手へ這入ると高尾山へ行く道左は山道開所まて來ると治郎吉は何處へ行つたか姿を消しました、ソコで八王子から附いて來た若い者等は小僧の行衛を探したが一向に相分りませんだ、

さて治郎吉は横道へ這入ましして相州路へ係り荻野の山中に於て

闘らずも怪しき武者修行の武士に出會ひまするといふ、天狗小僧寅太郎に出會するのお話でございます、

第四席

さて此處に亦旅籠屋の場でありまず、總て物の本、或は劇場抔でも同一模様の處は成る丈之を省かねば相成ませぬ、譬へて申さば前の幕は峨々たる深山の光景で其次の幕も亦山の場でありましたらば、其間を一ず舞臺を廻すとか、又は小幕を附けて御殿場を見せるとか或は賑やかな所を差加へるといふ、是が劇場抔の作方の常であるとのこと、然れば講談も前の一席が海の所であれば其次も亦海の場を演ずるといふは自然と聽衆の倦厭を惹起すといふ恐れがあります、然るに此お話の第四席目が又旅籠屋であるから、演者も餘程苦勞をして居りますが、何うも外に此所へ欲める種子が

ありませんから止むことを得ず看客の御目元の穢らぬ處は近頃恐縮であります、

爰は相州愛甲郡荻の山中と申て、此所は厚木から小田原へ出ます る筋て大山下でありまする、其頃は相州小田原の城主大久保加賀守殿の分家、一万石の大久保某の陣屋のありました所で、御城下といふ程ではありませんが陣屋下で、素より山間の避地ではありますが、戸數の五百戸もあつて一ト驛を爲して居る所、此宿の中程に春屋嘉右衛門といふ古い旅籠屋があります、時は十二月のことで世間は一般に霜枯れ從つて斯ういふ所は往來も希であります とある一軒の旅店、夫婦共に店頭へ出て客人の宿泊を待つて居る處へ糸立を身に纏ひまして菅笠の破たるのを手に提げて十五六に相成る伊勢參体の子僧が飛込んで參りました、是れ別人ならず

前回に述べた鼠子僧の治郎吉であります　治「モシお前さんの家は旅籠屋で御座いますかイ、切望一人旅ですがお泊なすつて下さらねへか、春屋の亭主がチロリと見ると伊勢參の子僧、錢のあさそふな奴と見ましたから　主人「エヽ、吾等の所は旅籠屋には邊ひあいがお前方の泊まる所は此宿外れへ往くと木賃宿があるから开所へ往つて泊んなさい、大きな榎木が前にある家だ、开所へ往つて泊めて貰ふが宜い　治「モシお前さんが御亭主かね、人は見掛に依らないものだ、其んな馬鹿にした事を言ふものじやアない、私の身裝が悪いから、大方乞食が伊勢參と思つて木賃宿へ泊まれ抔と云ひなさるが木賃宿へ泊まらふと御本陣へ泊まらふと此方の勝手だ、お前の家の前に行燈が点いてる店が開いてたから泊まらふと斯う云ふのだ、身裝が汚ないたッて江戸ッ子だよ、懐中に錢が無け

れば普通の旅籠屋へ泊まらふたァ云はないよ、夫とも泊める事が出來ねへと云へば夫迄の事だが、木賃宿へ泊まれとは何と云ふ失禮な事だ、泊めねへなら泊めねへで宜いや　亭主「若しお前さん然う理屈を云つては困る何に私共でお泊め申さんと云ふ譯ではないが御風体が何うも木賃宿へでも泊まつた方が宜からふと思ふから吾倆共の通じやア普通の旅籠錢を取るよ　治「當然サ、私の方でも旅籠錢を拂はうと思ふからよ、夫に小夜張とした夜具蒲團でも着て寢やふと思ふから然う云ふのだ、御亭主私が錢を持て居ねへと思ふから、其方へ些とばかり預けて置かうか　亭主「イエ何ういたしまして夫には及ひませぬ、サアお昇んなさいまし　治「泊めて呉るから器用に泊めて呉んなさるが宜いのだ、何も別に持て居るものはありませんが、小ぽけな包と糸立と笠と汚れた腕半に草

鞋丈は其方へお預け申やすよ　亭主「ハイ〳〵確にお預り申ました　治「サお昇んなさいまし、

是から治郎吉は足を洗つて上へ昇り、案内に從つて往くと、一番奥の寒さうな六疊許の詰らん小座敷へ案内をいたしました　治「オイ〳〵姐さん何より御馳走は火だよ、成たけ澤山に入れて火鉢でも案下でも宜いから持て來てお呉れ　婢「ハイ畏りました是から女中が茶を一杯に火鉢を夫へ持て來る　治「姐さんモッと火をお呉れ寒〳〵つて仕方がねへや、何うも茲等邊は山と山の間だから恐しく風が吹きアがる、姐さん今夜は外に泊りはねへのかい　姐「イエお一人様御上段に　治「ウム爾うか、じやア私と共に二人だナ　姐「ハイ　治「モウお湯はあるまいネ、お前の所に　姐「左樣でおざいます、風呂が少し損じて居りますから唯今私を差上げますから、是

から二軒許先に……　治「オッと夫はまアお斷り申しやす、湯へ行く位なら、火で能く暖まつて寢ちまつた方が宜い、姐さんチッと待つてお呉れお前は能く用を聞かずに行かうとするじやアねへかまア少しお待よ　婢「ハイ何ぞ御用で　治「何だッて用があるから呼ぶんじやアねへか茲の家では大層私を賤しめて乞食か何かのやうに思つて木賃宿へ往つて泊れと言つたが私も江戸ッ子だよ、而かも職人だ、懐中に錢が無へと思はれたのが口惜いや是は誠に少ねへが茲に一歩あるからお茶代だと云つて御亭主とお内儀さんの前へ出して呉れ　婢「夫は何うも有難う存じます　治「旅籠錢は二百か二百五十だらふ、汗所へ百疋の茶代を置くあア江戸ッ子だ　婢「何うも有難う存じます　治「オヽ少し待ねへ、是は餘り少ねへがお前に一朱やらア　婢「是は何うも有難う存じます　治「夫から、モ

ッ一歩外に預けて置くから今夜の旅籠から、食物が些と贅澤だよ宜いか其積りで　婢「ハイ畏りました　治「昔通のお平、味噌汁、向附乾菜の煮たのや何かは扱にして、何か外に出來やすか　婢「左樣でございます御誂へあされば何でも……　治「何でもと云つて茲等へ來て贅澤を云つても眞逆八百膳の料理も喰はうと云ふ事も出來めへから斯うしてお呉れ、鳥があるだらふ、鳥　婢「ハイ　治「鳥わチ、かしはが宜い、而かも黄足が好いや、幾ら出ても構はねへから二人前ばかり、夫から葱の白味と砂糖と味淋と醤油を前に持て來てお呉れ、此方で好いやうに煮るから夫に好い酒を一本お燗を附けて、極まつてらアあ　婢「夫で宜しうございますか　治「後で玉子燒を拵へて飯を持て來て呉んあ、玉子燒も田舍流に餘り油を餘計に引いちやア往けねいよ、生揚がんもどきでも喰ふやうで油ぱくッ

て往けねへから、汐を引かすにドラ猫燒にゐ頼み申しやすぜ　婢「畏りました　治「オヽ〳〵姐さん往つちやア往けねへ、まだ誂へものがあるんだ、香物も酸味のは往けねへから新漬があるから大根でも何でも搦しねへから夫に田舍の事だから味噌漬の旨エのがあるだらふ、彼奴を薄く切て持て來て呉んゐ　婢「ハイ畏りました治「まだ追に後から誂ひやせふ、

是を女中は店へ參りまして　婢「チョイと旦那何うも恐ろしい生意氣な子僧じやアありませんか、コレ〳〵でおがいますよ、とお茶代を出し誂物を並立ると富屋の亭主が失笑して　三人「江戸ッ子の子僧の、伊勢參と間違ひられたのを口惜しがつて、併し一歩の茶代と云つては御大名の泊りでも滅多にあい、勿論俺の家へ大名樣が泊まつた事もあいが、おみつやチョイと禮を云ひに往つて來な

よ　みつ「否ですよ子僧に禮なんぞを云ふのは　亭主「子僧に云ふのじやアあい、一歩の金に禮を云ふのだ、お前が其んな了見だから當家の稼業が衰微して仕舞うのだ　みつ「其んゐら貴郎往つて居らつしやいな　亭主「俺は否だ、子僧所へ往つて頭を下げるのは……

……みつ「吾儕だッて否だよ　亭主「否でも仕方がねへ一歩貰つたのだから其代りお前に半分やらアな　みつ「半分お呉んなさるッちやア往つて來ませふ……現金な奴君があつたもので　亭主「菓子でも持て往きな、ナニ荒粉落雁、アレハ往けねへアレは去ん貰つたので大分あれは時代が附いて居るから、此方のカステーラが宜い、其カステーラと最中とを旨く並べて、夫からお茶を濃く入れてチョイと禮に往つて來な、仕方がないから女房がカステーラを五切ばかりに最中を扱ひ之を南京燒の菓子皿に盛り、箸を添へて左

の手に糸目焼の土瓶に河柳(茶の銘)か何かを入れて女房はズッとやつて参りましたが座敷の入口にて川越唐桟の前垂をチョッと帶の間へ挾む、是れ客人の前へ出るといふ禮義でもありませふが障子をがらりと開けまして　みつ「アノお疲労さまで居らつしやいませふ、唯今御注文の品が出來ます、まア一服召上りませ、今晩は大層お寒いやふで、夫に唯今は又御無用にあさいませんで澤山に御茶代を下さいまして下女迄に有難う存します　治「イヤお内儀さんてすが、モッと何うかするんですが、到底伊勢参と間違へられるやうな始末ですから　みつ「イエもー恐入ます、是は詰らんものではございますが、お慰みにお茶を……　治「是は何うも御念の入やしたみとで有難うでぜへやす、ウム是は結構なお菓子でカステラですな併し大分時代が附いてるよ、樗現様時代の品かと　み

つ「頓た事を仰しやいます此月初に貰つたんですよ　治「御亭主のお上んなさるのを小哥が掠めたやうなもので御氣の毒さまです、夫に此最中あんざァ小田原時代に出來たんだテ　みつ「お前さん本當に口の悪い事ばかり仰しやいますよ　治「今能く見りやあお前さんは當家のお内儀さんだテ、先刻はお店の灯火がボンヤリして居て分らなかつたが、今能くお目に掛れば三十格好だテ、年増盛で脂の乘つた處で堪らねへテ　みつ「オヤまア人を椰揄しては往けませんよ、まアお緩くり……　治「お内儀さん些と後に遊びにお出あさいよ　みつ「有難う存じます、

女房は生意氣な小僧だと思ひ升から店へ來て　みつ「往つて來たよお前さん　亭主「何うだッた　みつ「何うだッて本統に生意氣な小僧だッちやアない、菓子を出したらばテ、厭に輕蔑んで、是は大分

時代の付いたカステーラだ最中の方は小田原の北條時代に出來たんだらうと云つて本當に口の惡い奴だよ　亭主「ナニ先刻の竹蹄近しをしたのだ　みつ「夫から吾儕のふとをお前は家のお内儀さんかへ、店の灯火がボンヤリして居て分らなかつたが、今明るい處で能く見れば三十位だ、年增盛で脂の乘つた處だと云つて嘲弄したよ　亭主「爾うか、ナカ〳〵小僧でも目が高ェや、三十格好で、脂の乘つた年增盛だもの　みつ「お前さんまで其んな事を仰しやる人を馬鹿にして……

其裡に追々に出來た誂物を運ぶ、治郎吉は下婢を相手にして頻に酒を飲んで居りましたが、子僧の癖にガブ〳〵飲む　治「姐さん贅澤ッ云ふのじやアねへが、モウ些と好い酒はねへか、何うも少し是は臭氣があるやうな心持がするから　婢「左樣なら又一ッ吟味を

いたしませふ　治「此んな山の中へ來て酒の好いのてへのは無理な注文だに、何處か酒屋を一ッ探して見てお呉れ　婢「畏りまして　ございます　治「一升でも二升でも宜いから持て來てお呉れ、明朝立つ時に又飲むから、夫から別してお頼みといふのが外じやアねへ絹、布に寢やふたア云はねへ、此方等だから木綿物でも宜いからサッパリ洗濯をして糊の硬い半襟抔の脂臭くない奴をお頼み申やすぜ、千手觀音樣の御利益を蒙つて寢ると直にムッ〳〵なんざア御免を蒙りてへテ　婢「貴郎はモア何でも御承知でございますチ　治「ナニ小哥は幼稚の時分から旅をして居るからサ　婢「オヤ爾うでございますか、大分方々を……　治「エ、今度は御推量の通り上方から伊勢の方へ往かうと思ふのですが、小哥ア職人だよ、決して怪しいものではないよ　婢「左樣でございませふとも……　治「

時に姐さん隣室に泊つて居る人があるか、上段かい　嫂「ハイ、左様でおざいます　治「お客様は何だい　女「小田原の浴藩中で武者修行にいらつしやいました旦那様で、まだお年は若かうございますけれども久振で急にお歸りになりましたが、手前方はお馴染でございますから　治「武者修行――野暮な事をなさるチ　女「大きな聲をなさいましては往けません　治「爾うか御免なせへ、と是から酒を飲み飯を食して居る裡に、下女が持運ぶ夜具蒲團　治「姐さん枕は成たけ痛くねへのを貸してお呉れ、今までベラ〳〵饒舌て居た事と思ふと開所は子供、枕に就くが早いかグウ〳〵と眠込んで仕舞いました夜中とも覺しき頃不圖目を覺ますと、此所は相州愛甲郡即ち大山又は丹澤山――是は有名の山にして其他の岳山の連つて居る所、之を形容して申すのは、連山嚴々として波濤の如し

抔と云ふ所でありますから夜風が身に染みまして子僧、酒の酔は醒るし、大きな欠びをして　治「ハアー、亭主に俺を伊勢參の子僧と聞違ひられ、木賃宿に泊まれと云はれたのか癪に障つて、詰らねへ喇弄ごらを言つてゝ食へもしないものを餘計に誂へたか、何たかサッパリ旨くねへ鳥だ何うも酒の酔が醒て見ると酷く寒いぞ、モウ何時たらう、鐘の音も聞こへねへが、夢を見た樣すじやア、モウ九ッ半彼是八ッかな大分世間が靜かに成たナ、獨言を云つて居りまするとと上段の座敷に泊まつて居る客人の方にてチャラン〳〵と云ふ音のするのは、小判でも數へて「居るやうな塩梅、アト夫が治郎吉の耳に留まつたから密と起上り建附惡しき襖の隙間から覗いて見まするとと、行燈の灯火を掻立まして夜具を跳除け、二枚敷詰た蒲團の上に胡座をかいて寐もやらず居りました、其武士といふは

年齢廿歳格好、旅から旅をかけて來たものと見へて、月代は延びて五分程、色は格別日にも追けず白くして眉毛濃く、兩眼淨らかに鼻筋通り口元の締りました先づ美男と云ふ方であります、上着を脱いて半襟の掛つた下着に細帶を締め、一旦寢たものと見へて胴卷の中から取出した小判を頻に數へて居る樣子、息を殺して治郎吉は見て見ると、其武士が獨言　武士「苟旦の武者修行と冒立て、本國小田原を出たのは、昨日今日と思ふ裡に早三ヶ年久振で鄕里へ歸るのにアノ通り物堅い母上ゆへ、三年前に修行に出た時には僅に五十兩の金を持て出た此方が、斯く大金を所持して居ることを若し母上の御目に留まらば思ひも寄らぬ御嫌疑を蒙り、且餘計な御心配を懸ねばならぬ殊に義理ある舍弟にまで苦勞をさせる譯ゆへ、明日小田原の家へ歸つたら、何うかして人目に立たないやふ

所に密と隱して置たいものである、ヨシ〳〵斯うして置けば明日の都合が大きに宜しい、と二百兩程の小判を數へて胴卷の中へ入れ、緊と結んで己が寢て居る二枚敷いたる蒲團の間へ之を押込んだは道中に慣たる武士と見へまする小出しは僅に二三兩　武士「是ならば母上も弟も怪しむまとはあるまい、と其小出しの金を入れたる錢入を枕元へ投出し　武士「アヽ、久振で卿里へ歸るのかと思ふと何とあく心嬉しく、モウ眠られぬワイ、併まだ三時や四時は眠る間もあらふと再び夜具を引被り枕に就いた彼の武家が、何時しか眠りしと見へて、鼾の音のみグウ〳〵と聞こへる、始終を見聞した治郎吉が　治「アヽ、ハテな、今の獨言の樣子じやア三ヶ年以前に修行に出た時には五千兩の金を持て居たが、今二百兩からの小判を持て歸ると母親や弟に苦勞を掛る……ウム、何だらふ、外見は

立派な若武士、御大名の若殿様と言つても恥かしくない武家姿だが、人は見掛に寄らねへや、矢ッ張曲者か知ら、何しろアノ二百兩の小判を滿國の間へ胴卷ぐるみ入れて寐たが、彼金を此方へ卷上げてへものだナ、八王子の宿で仕事をしたのは唯た三十兩使へば自然に減るものだ、又後を仕掛て置かあいと上方まで行くのに心細いや、爾うだ〳〵と大腹にも、眠込んだ樣子は確乎と認め、枕元にあつたる土瓶の茶を唐紙を建たる敷居へズーット流しました、爾うして音をさせぬやうにスーット開け目星を附た隣座敷枕元の灯火をフッと消せば眞の闇、彼の武士の敷きる滿國の間へ手を差入れて胴卷の端を攫みグーッと引くと眠入端と見へてウ、ーンと寐轉を打つ、其身体の浮いた處をグーイと引く、ズル〳〵と其の胴卷が治郎吉の手に渡る、造化精妙と喜んで懐中へ捻込み再び

振足差足已の居間へ歸らふとする途端　武士「待てッ」と一聲、あッと驚きまする所を枕元にあつたる鐵扇を把てズーンと打たれ、あッとひるむ處を忽ち起上つて彼武家小僧の足を把てグイと引いたから、治郎吉は此人の傍へ引寄せられる　武士「ヤイ、汝鼠の分際として我に對して此所業に及ぶは、虎の髯に戯れるに均しい愚も亦甚しい奴だナ、何樣馬鹿面だか見てやらうと膝下でスッヒリ治郎吉の身体を壓へて置いて、用意の早附木を取出し、枕元ある煙盆の火を移して行燈に點けました(但し當今の擦燧ではありません昔は硫黄の這入た板目紙で製したる道中の早附木ゆへ念の爲め御斷り申て置ます)燈火の影に透かして治郎吉の顏を見て　武士「ヤ、汝は宵に人の眠を妨げたる生意氣な事を饒舌た子僧だナ、拙者の物に目を懸るとは大胆不敵な奴だ、サ早く其胴卷を此方へ返せ

治「ヘイ恐入ました、ヘイ連にお返し申上げます　武士「イヤ是は拙者が惡かつた、大切の金を蒲團の下抔へ入れて置くから其方に盜心が出たのじやらふ、から桃元へ投り出して置けば宜かつた、早く彼方へ往つて寢ろ、馬鹿子僧　治「ヘイ何うも恐入りましておさいます、左樣ならば御武家樣お体みあそばしませ、お抱卷の裾でも壓つて參りませうか　武士「餘計な事をするな、治郎吉は想はず冷汗を流しながら自分の居間へ歸つて　治「アヽー恐ろしい事だ、十分に仕事が出來て宜い塩梅だと思つて、闇所をノソ〳〵歸らふとする時、待てッと鐵扇でイヤといふ程腰ッ骨を打撲られ、足を把て引寄せられた時にア、本當に摑み殺されるかと思つたが何だらふナ彼はまア、氣味の惡い人が居るものだ、二百兩這入た胴卷が此方の懷中へ這入たかと思ふと直に先方へ御返濟、上には上のあるもの

だナ、ア夫は宜いが俺の懷中にあつた胴卷がねへぞハテナ、是は何うしたのだらふ、確に俺の腰に卷いてあつたのだが……、ア、夫りやア今先方へ胴卷を返す時に、俺のまで一緒に返したか知らん、其逆其んな事もあるまいが不思議だナ、併何うしても此方の座敷になければ隣の座敷へ置いて來たに違エねへ、仕方がねへからモウ一遍往かう、と又のめ〳〵と隣座敷へ這入て來た　武士「コレ〳〵子僧また來たか、何をしに來た　治「イエ何もいたしませんが、一寸御武家樣に伺ひますが唯今惡作を致して、貴公樣に金を御返濟いたす時、私が少々持て居りました代物が懷中にございませんか、不思議な事があるもので、若しやお座敷に殘つて居やアしませんねと思つて一寸探しに參りました、此時武士は莞爾笑つて　武士「アハヽヽ更紗の胴卷か　治「ヘイ　武士「夫ならば此方へ來て居るが……

……　治「ヘイ　武士「手前の懐に這入て居るのが否だと云つて疾に俺の懐ろへ來て居るよ、胴卷ハ……　治「ヘエー何時の間にと云つて、何でも手前に氣の附ぬやふな事では往武士「何時の間にと云つて、何でも手前に氣の附ぬやふな事では往けない、總て人の物を取るには其當人に取られたなと氣の附くやふな事で仕事が出來るか馬鹿め、返す〳〵も貴樣は間抜な奴だナ、サ返して遣るから持て行け、莞爾笑つて投出した、了得の治郎吉もアッと驚きましたが　治「エ、御武家樣何で……　武士「ウム何でも宜いから早く彼方へ往つて寐ろ、馬鹿子僧能く胴卷を腹へ卷いて置け、ウッかりして居ると又此方へ脫けて來たがるから　治「オヤ〳〵　夫は何うも大變で、是から治郎吉が再び寐所へ歸つて　治「ヤ、彼奴は何だらう、と不審を打ました、其翌朝に至つて始めて此人の本性が知れるといふ、抑も此武家は何者でありますか、次回お

樂みといたしませふ。

第五席

其翌日の朝治郎吉が目覺て四邊をキヨロ〳〵見廻し　治「ヤ、昨夜泊まつた番屋の家だナ、見れば大分日も高く成た樣子だが此ア思はず寢眠ざしたと見へた。獨事を云ひながら手を打ちましたスルと其所へ昨夜の下女が來て　婢「オヤお目覺でおざいますか寶はお起し申さうかと思ひましたが餘り能く眠てゐ在でございましたから御遠慮申して其儘にして置ました、お火を持て參りました　治「アイよ、姐さん昨夜は大きに御厄介に成たねモウ今朝は餘つ程遲いの　婢「ハイ、モウ彼此五ッ半でもおざいませう歟　治「爾うかね吾儕は昨夜二度目が覺たが、明方からグッスリ眠込んだと見へて、就いては姉さん隣室の上段の間に泊まつてお在なすつ

た御武家様はまだ御目覺がないかい　婢「イエ今朝モウ暗い裡にお立に成ました　治「何だと今朝モウお立ち……アヽ爾うかね、彼は全体小田原の御藩中で何と仰しやる御方あんだへ　婢「彼は本當は小田原の御藩中ではありません、小田原より少し手前に飯泉と云ふ所があります、其處の郷士あんで飯泉七郎といふ御方があります其御宅の若旦那様でございますよ、夫が三年以前に少し仔細があつて武者修行に出ると仰しやつて御出掛にありまして今度久振で故郷へお歸りになるのでございますが、當家の旦那は其飯泉の大旦那様とは大厝お心安くあすつて居らつしやる、夫ゆえに若旦那もお馴染みあので　治「ハア爾うですかい、吾儕もチョイと御見受け申たが立派な御武家さんだね　婢「ハイ、男振も好し、夫に大厝お強いさうでございますよ　治「今朝まだ暗い裡に……

婢「ハイ、早く御仕度をなさいまして、夫からお商さんの事を吾儕にお聽きあさいましたよ　治「ハー吾儕の事を、何てッて　婢「アノ隣室の小僧はまだ寐て居るかつて　治「ウム夫から何と云つた　婢「吾儕がまだお休みでございますと云ふと、アノ小僧は何であらうと斯う仰しやいますから、左様でございます、到底碌なものじやありますまいつて　治「酷い事を云つたな、夫から　婢「爾うするとからりと障子を開けて貴下の眠て居る顔を見て、怜悧さふな奴だが眠て居る處を見れば馬鹿氣た面だと斯ういつてお出で御座いました　治「アハヽ好い面の皮だ、頓でもねへ冷評に出ッ會すもんだ、何うしてアノ旦那はまた遠くはお出にあるめへな　婢「ハイ何だか此先の金子といふ所に御親類があります、して、所へ一寸寄つて往くと仰しやいましたッけ何を思つたか治郎吉は急に身支度

をいたしながら　治「アノ姐さん茶漬でも宜いから早く持て來て
ゐれ一杯掻込んで直に出掛るから　姉「爾うで御座いますかと
直に御膳を持て來る、手早く一椀食して膳を片附させ、昨夜預けて
置いた一分の金で旅籠錢や何かの勘定をいたして餘錢を取り
治「大きにお世話になりました、と云棄て糸立を身に纏ひ尻を高く
端折り菅笠を被つて番屋の家を立出ました、
是から治郎吉はズン〳〵ズン〳〵金子と云ふ地名を聞き〳〵足
を早めて來る、丁度此狹の山中を出て一里半許參ると茲も同じ山
道で今其の山道を段々〳〵下つて來ると雪の翌日ゆへ極く快晴であり
ます、四邊一面目ばゆき計りの銀世界、モウ人が歩行いたと見へて
途が附いて居る山道をズン〳〵急いで來る、見下す方は一面の畑
地、其畑の細道をば菅笠を被つて立涙なる大小を帶し義經袴を甲

裝〳〵しく拵きまして武者草鞋で雪を踏んで行く武家姿が遥か
向ふに見るは、確に昨夜の武士だと思つたから山の上から　治「オ
ーイ、旦那樣ア、オーイと餘程町數が隔つて居るから呼びました、此
聲を野國が傳へて仲んの武家の耳へ入たと見へて笠に手を懸け
おがら後ろを振反つて見るト　治「旦那樣ア、と云ひながら雪の中
を政々と飛んで來る子僧がある　治「旦那樣少々切望か待あすつ
て下さいまし、唯今夫へ參りますから、と九十九折ある山道をも厭
はずして飛鳥の如く横筋違に飛んで參りまして、仲んの武士が歩
を停めて居る處へ近づき、胸を叩き息を忙しく吐きあから　治「ハ
ッ〳〵、旦那樣貴公樣は金子と云ふ所へお立寄と聞きましたから
夫じやア急いで參つたら御跡を慕ふ事が出來るだらふと一生懸
命に飛んで參りましたが、漸く此所で追附き此んな嬉しい事はで

ざいません、さて旦那様昨晩は、失禮と申さふか、何とも御詫の申上げやうもおざいません實に恐入た次第でございます、切望まア御免あそばして下さいまし、彼の武家は莞爾笑つて治郎吉を打見やり　武士「ヲヽ、子僧か、何だが後ろで頻に呼ふから、一ト筋道、外に誰も居ないから俺の事たらうと思つて待て居たが、貴様は昨夜番屋の隣室に泊まつた子僧だナ　治「ヘイ恐入ます、其んな事を仰しやられると、脇の下から冷汗が出ます、誠に鼠の分際で虎の髭に戯れるかと仰しやいました通り身知らずと申さふか、實に馬鹿氣た子僧だと仰しやられましても我身ながら呆れる位、夫ゆへ先非を悔ひてワサ〳〵お詫に參りましてございます　武士「イヤ夫は餘計な心配だ、左様な事は何うでも宜いのに　治「イエ何う仕りまして、就いては旦那様に甚だ恐入つた事を伺ふやふでございますが、私は何を隠しませう、江戸表で申若切の頭をいたして居りました治郎吉と申す破落戸でございます心柄とは言ひながら、生みの両親から堪當を受け眞人間の交際も出來ませず到頭惡黨の仲間入夫から江戸にも居られず、彼方此方を彷徨つて、是から上方へでも參りませふと存じまして圖らずも八王子から相摸街道へ掛つて參りまして昨晩の始末、旦那様の物を取らふとしたるが反對にあつて、私の懐中にあつた僅ばかりの金子の這入た胴卷が何時の間にか貴公様の方へノタクリ込んだが、アノ呼吸が何うしても私には分りません就きましては申上げるも如何な事でございますが、出しもアヽ云ふ法だか、術だか知りませんが、アレを私にお授け下されませふならば、是から先好い仕事も出來ませう、大きに都合の好い話でございます侍し是は私の口から申すも如何でございます

か、決して今日他人樣のものを無暗に取らふとは思ひません、何うかして困る人には物を施してやり非道にして不儀の富貴とやらに惜らして居る其人の貴寶を取て不仕合な者に施してやり、僅の金ゆへ死あう抔とする者を助けてやりたいと私の志でおざいます、夫はまア口ではかり何を申ても嘘だと思召ませふが、全く私の心底は嘘うでございますか、切望一ッ昨晩のやうな事を、稽古をして出來ますことなら御傳授に預りまするとと、若し悪い奴が金でも持て居たら、其奴の懐中にあるものを手放しに引出し本人がポンヤリして居る裡に、何時か此方の手へ這入たあら、唯今申上げましたやうに、可憐な哀しい金に困る人を助けて見たいと三ッ兒の精神百までとやら、生涯の希望は此所でおざいますが、切望旦那樣、出來ますことなれば、其の奇術を此傳授を願ひたいもので、居た差付がましうございますが、折入て此段を願ひます、侍に往來中で何でも相濟みませんことでおざいます、と大地へ兩手を突かぬばかりにして願みまするとと、彼の武家は莞爾笑つて　侍士「成程貴樣達の身に取たらば此術を心得て居つたら好い仕事が出來るであらう、此方は決して怪しい者ではないぞ、兎も角まア繰があつて此方の跡を追ふて來たものじやから話も御座らふ、アヽ手前は飯泉七郎といふ小田原領の鄕士の悴であるか、飯泉といふ所は坂東三十三個所の觀世音の靈場にて小田原から丁度二里、地頭から許されて苗字帶刀御免の家柄であるが仔細あつて吾輩は三ヶ年前に武者修業と名を付て奥州の果から越後、路總て東北地方を漫遊して來たが今日まで少し望みがあつて故鄕へ戻る所である、委しい事は貴樣に咄をしても仕方がないが、都合に依ては俺も京大坂の方へ

參るかも知れぬ、何しろ手前の言葉の裡にチョッと俺の氣に入た事がある、他人に格別の害を與へる丁見でさへなくば、俺が貴樣に彼の奇術を授けて遣はすから兎も角俺と一緒に來い　治「何うも夫は有難う存じます、早速御聞濟み下さいまして　武士「併し俺が敎へてやつた事を以て餘の人に害を爲すやふな事では是は一層敎へぬ方がましいが　治「ヘエ何卒左樣お御懸念あく、決して害にあるやふな事は仕りませんから、唯惡い奴をいぢめてやりたいと云ふ了簡なんでございます　武士「イヤ开所が面白いと申すのだ貴樣は幾才にある　治「ヘイ、十六でおざいます　武士「ムー、十六にしては餒少な　治「ヘヘヘ生れ損ないで　武士「イヤ何うでもあいが小さい併し怜悧さふな奴だナ　治「イエ餘り智恵もございません、昨夜のやふな不始末を仕出かし、我身ながら頓間にて堪りませ

ん、エヽ、旦那樣はお幾つで　武士「俺は廿歳だ　治「お立派でいらつしやいますナ、下女抔も大層御美男だと云つて騷て居りましたッけ　武士「下女抔に騷られたッて有難くはないナ、と話をしながら來る裡に茲許より僅かの道程で、遂に其日の正午過に飯泉と云ふ所へ來て見ると、農家でゐそあれ立派お一ト構へ、長家門に成て居て、裏には土藏の二ヵ戸前もありまする　○「オヤ若旦那樣が久振でお歸りだ、と饗を扱つて居た作男が告げ「ると年齡四十有餘に相成る品格の好い母親が　母「まア霧太郎が戻つて來たアよ、と云ふ聲を聞いて、十七八に相成まする未だ元服を仕たての若者が袴を附けて　弟「是は御兄上樣お戻りでおざいましたか、と出迎ひまする、弟の新之助　母「霧太郎やお前報知もせず唐突に歸つてお出だから何の手當も　霧「イエ前觸をして置い

て踊るといふ程の身分でもございません、エヽ昨夜は此の山中へ泊まつて今朝晴い裡にと御様存じましたが金子へチョッと寄つて参りましたが先以て母人にはお變りもなく御健勝で弟も御無事で　母「サ、まア何は兎もあれ早く足を洗つて　霧「ヘエ格別汚れもいたしません、治郎吉も夫へ出まして　治「エヽ、是は御母公様でございますか、私は此旦那様の御供を致たして参りやした小僧で母「オヤ〳〵可愛らしい小僧を連れてお出だが、是は何だい、お前の道中のお供で　霧「イエ昨夜狭の春屋へ泊まりましたら、开所で出逢ました泥棒の小僧で　母「エ、何と　治「旦那其んお事を仰しやつては困ります　霧「イエ、ナア寶は狭の旅籠屋で一緒に成ました伊勢参の小僧でございます是から小田原の道了様へ参詣をいたしたいと申ますから、道連にいたして参つたので、サ治郎吉此方へ昇

れ　治「ヘイ有難う存じます

是から村方の者や一族の人々が集まつて三四日間と云ふものは酒宴を開き喜びの意を表した抔此等の事は諄々しうございますから申上げませぬが、抑も此家の主人飯泉七郎と云ふ者は今を去ること四ケ年以前、何者にか酒匂川の渡場に於て寸斷々々に斬られて果敢なき最期を遂げました其時滞して居た五郎入道正宗の正眞の名劔を賊のために奪はれました、是に於て小田原の領主へ此趣を届出し兄弟とも仇討を仕たいと云ふ希望は内心にありましたが當時の世の中、仇討は天下一統の禁制夫ゆえに素志を遂げる事も出來ず殊に弟は家付き然るに霧太郎は飯泉七郎が何者の子とも知らず拾上げて育てたるもの、されば弟新之助は此家督を譲り、吾は幼稚の時養父の爲に拾はれて十八才まで育上げられし

大恩があるから其恩報じのため、酒匂河原に於て養父を切害して立退いたる奸賊の行衛を尋ね仇討を爲さんと決心いたし其士地の代官へ届を出し彼が奪ひ去つたる正宗の行衛をも取調べ、夫を携へたる上家に歸るが養父に對しての恩報じである且は此身の義務であると斯う心意ましてさてこそ三ヶ年以前に舍弟母親に内實を打明け東北地方を旅行したものと見へまする、此霧太郎が懐中に二百兩餘の金子持て居る是は一ッの不思議でありまする是には些と又別に仔細のあるみとで追々卷を重ねて霧太郎の話は後に出ますから其時に至つて彼の二百兩の金を携へて居るといふも成程とお分りの來ることもありませふ、尚は講演の都ごに依つて此金の出所は一切申上げませぬ、

さて怜悧なる治郎吉沖へ心に夫と摸樣も分りましたから、四五日

といふのも了稚同樣忠實しく奉公をして居る裡に彼此一ヶ月も經過ました或一日霧太郎が治郎吉を連れて道了權現へ參詣に參りたる其歸途、道了權現の裏山人跡途絶へたる所へ來て治郎吉に向ひ　霧「コレ治郎吉其方は何うしても賊心を止めることは出來ぬか、又汝の人相を見るに到底其方は兵人間にはあれぬやふに思はれるが、夫とも今より改心に及んで誠の道を履むことが出來るか、篤と尋思の臍を固めて返答しろと嚴重に問はれました治郎吉はモヨ〳〵しながら　治「エ、旦那樣本心に立反つて眞人間になりたいと申上げたうおざいますが、私は生來ての盜人と見へまして、何うしても面白くッて此業は止められません、けれども日外も お踏りの時途中に於て申上げました通り、私は決して可憐お人の懐中に目を懸ません既に旦那樣へお話申すもすまんみとであ

りますが小佛峠に於きまして箇樣々々の事がありました、其旅賊めらが如何にも憎う思ひましたから辛き目に逢はせ尙ほ谷底へ落ました六部巡禮の死骸でも責めて葬つてやりたいと話に聞いた小佛峠の谷間をば其翌日に至りまして夫となく探しましたけれども死骸も知れず何うしたか聞く人もおし其儘に成て居ましたが此んな事は何か私が斯う人間らしいことを申上げるやうではありますが、爾ういふ私の了見でおざいますから、然して可憐あ者の金おどを掠取らふとは存しません、唯非道に貯へた人の金を取て現在難儀をして居る者を救ふてやりたいと云ふ了見でございます夫ゆへ何うも盗みばかりは止められないと決心をしました　霧イヤ面白い、熊坂長範と云ふものは生涯賊を働いて六十餘才の長壽を保つたが源義經の手に掛つて美濃國青墓に於て命を

棄る又漢土の盗賊といふものは人の肉をば喰ふ程の大惡人あれども是も亦六十餘才の長壽を保つた、何ぞ善根でもあつたか知らない天晴れだ到底改心が出來ぬと云ふ者に改心をせよと云つた處が用ゐもいたすまいから賊あら賊でも宜しいが、俺は其方と生涯絶交をいたすから此後遇つても決して言葉は換はさぬぞ、其代り其方に教へて遣はす法術がある、と是に於て治郎吉に對して鼠形變といふ、隱形五遁即ち五行に依て其身を隱し、其形を變する例へば水中に隱れて溺れず、火に依て爛れず、木に依て姿を隱し或は金に依て其身を隱し土に隱れて姿を變する、實例を擧げてお話をしますと、右幕下頼朝公が治承四年の八月石橋山の伏木隱れといふは即ち木に依て形を隱したものである、又牽强附會のやふだが金に依て姿を變ずるといふは、山伏の劔の及渡り抔といふ術も是

から出たことでありませふ其他火に依て形を隠す火遁の術は八犬傳の作物語ではあるが、犬山道節が丸塚山の猛火の中に形を隠すの類、是れ修驗者の火渡りといふ事もない事ではありますまい其他は諒々しいから略して述べませぬが、隠形の五遁の中鼠形遁此等の事を細々霧太郎が治郎吉に傳授をいたしました　霧「此方とても用ゐて益あき事、唯心得て居るのみじやが、是は或人よりして旅先に於て教を受けたのであるが努々妄りに用ゐること勿れ人の爲めに用ゐるといふ事あれば止むことを得ぬ事であるか能く心得よ、唯今此裏山に於て傳授をいたし茲で霧太郎は飯泉へ歸る、治郎吉は別れを告げて上方へ參りました其頃上方といふは京大坂、諸方を遊ひ歩行きまして昨日今日と送る裡に早くも十年の星霜を經て丁度二十五歳の時が文政の三年で、大分世界の樣子も

變り江戸へ往つても最早知る人もあるまいから舊惡露顯の恐れもあるまいと頻に故郷が懐しく成まして東海道を下向に及ひ駿府二丁町の領城松山に出會ふといふ、是からが始めて世話場に移るのでおざいます

第六席

前回霧太郎の術譲りの處より殆ど十ケ年も經過したと申上げましたが、此間治郎吉は何をして居たがと看客から御尋ねもありませふが、京大坂は云ふも更なり、四國から九州地方を遊び歩行き表向は關東の博徒の交際で大坂倉屋敷の部屋〳〵抔へ入込んで江戸の治郎兄イと隨分人にも立られ、其内實は矢張賊を働いて居たのでありますが、其裡に十年を經過して前回に述べました通り頻に故郷が懐しくありましたから文政三年秋の始めから東を指して

下向をいたしたあとゝ見へまする

時しも八月の事、モウ江戸へ四十六里、駿河の府中まで來まして、傳馬町の萬屋と云ふ旅籠屋へ着いた是から江戸、四泊か五泊だから箱根へでも廻つて久振だから江の島鎌倉の名所古蹟を一覽してさふして江戸へ這入らふと云ふ了簡で、懷中にはまだ幾分かの金もあり、種々目算をして此萬屋の奥座敷で獨り考へて居りましたがまだ日は高し是から當地の淺間山へでも往つて見物を仕やふか二丁町でも素見さふか抔と考へて居る處へ、隣座敷へドヤ〳〵と這入て參りましたのは江戸ッこの三人連、膝栗毛の彌次喜太には一人多き道中、世間搗はぬ高調子　甲「ナアなア駿府まで來れば大きに旅心になつて來た、明日は八も知つたる宇津の谷峠、明後日は大井川と斯ういふまア日取だか、何と可愛子には旅をさせ

ろと云ふが本當に氣散じで宜ひナ、江戸の事あんざアスッカリ忘れちまつた　乙「本當によ、まだ俺達三人は女房はるし、小兒はなし、唯親父が案じて居るとか、伯父か愚痴を溢して居る位の事で、些とも跡に心が殘らねへから氣散じて好いや、オイ〳〵　姐さん此駿府と云ふ處は强勢魚類が旨いと云ふから成たけ番公に爾う云つて旨ェ物を喰はせるやうにして呉んねへ、宿賃は幾らでも江戸ッ子だ鐵金にア些とも糸目は附けねへから　婢「ハイ畏りましてございます、

是から三人は入浴いたす、程なく开所へ酒肴が出て飲み始めた樣子　甲「何うだ昔在原の業平朝臣と云ふ人は色修行に段々東の方へ下つて來たと云はア、夫とは反對で、此方等三人は上方へ逆つて色修行に出掛やふと云ふ今度の注文だが、是は何だぜ成たけ此方

から仕掛す、高く留まつて先方から御姫様か何かに附文をされるのを待て夫から露の情を施してやると云ふやふな事にしやふぜ

乙「此野郎大層な事を云つてるぁ、當にもならん事を言つてると生涯面白い事は出來ねへぞ、お姫様からが文なんテ、氣樂な事を云ふねへ併し御同然に江戸の土地を離れた時にア餘り好い心持は仕あかつたが小田原まで來て、向ふに山か見へる、夫か箱根だと聞いて、アノ山を越へるのかと思ふと心細かつたナ　乙「エッへゝゝ此野郎地金を云つてやアがる箱根山を見て泣を溢したのは手前だせ　甲「串戯云ふねェ、箒めアノ時は欠ひをしたんだ　乙「本當に手前のやふな弱い野郎は無ェせ、些と氣丈しろイ是から段々江戸へ遠くあるんだぜ、爾うして知らねへ土地へ近くなるんだから、恐くマゴ〳〵しやアがると瞞着られるから確りしろイ、夫から些と

臆風に物を言へ、將軍様の御膝元で此方等は人間に成たんだ、道中へ出て瞞着られては第一將軍様の御耻じになるから　乙「何だ其んな事を言ふ癖に手前が一番先に弱くあつたじやアねへか　甲「何故　乙「何故たッて江戸を出離れる時に、是から道中へ出たから何でも呼捨に仕やふと約束をしたらふ　甲「ウム約束をした　甲「夫を手前が第一番に破つたじやアねへか　乙「何日破つた　甲「大森のアノ長丁場へ來ると右手に藥舗があつたから鐵ャイ、アレハ何の家だらうと聞いたら和中散だと斯う云つて直にさんの字を附けやアがる　乙「本當に此奴ア分らねへ野郎だナ、此家で賣る藥は何と云ふのだと聞くから和中散だと斯う云たのだ　甲「夫たからよ呼捨にしろと云ふ舌の根の乾かねへ裡にさんの字を附けるからよ　乙「モッ俺は手前とは話をしねへ、何度無學文盲だッて好

い加減にしろ、和中散といふ薬の名なんだよ　甲「薬の名でも何でも宜いから呼捨にしろ　乙「筏棒め薬の名を呼捨にする奴がある ものか　甲「江戸ッ子の威勢を見せて道中の婦女を撫切にしちまふのだから、威張て歩行け爾うしねへと雲介だノ間屋場の役人に威迫られてよ、氏神様の耻辱にあるんだ、「大層もねへ事を云やアがるナ、世間搏はぬ高調子に罪の無い話をして居るのを聴いて治郎吉が　治「此奴ア面白い、俺も久振で故郷へ歸へるのだが、江戸を出たのは子供の時、物心を覺へて十年目に歸へるのだ、江戸の人の咄を聞くと何たか懐しいやふだ、併し此手合も始めての道中と見へる職人だらう、何でも宜いから今宵一ト晩心安く飲み合つて道中の様子を教へてやり此方も知らね事を聴きてへもんだ、と治郎吉も隣室の旅客か懐しく思ひましたから、女中を呼んで何やら

誂物を二分許注文する當今とは違ひ諸色の安い時分だから大した肴か喰へる　婦「エヽ、旦那お誂は此品でございます、治郎吉はチョイと目を通して　治「ヨシ〳〵　大層立派だナ、ぢやア直に隣座敷へ持て行つて、最前からお一人で泊まつた江戸のお客様だか、お前さん方へお近つきのため失禮ではありますが、此お肴を御覧に入れますと斯う云つて一寸持て行つてお呉れ　婦「ヘエ畏りまして　とさいます、

是から宿の下女は彼の佳肴を重たげに持ましてやつて参り、障子を開けて　下女「御免下さいまし、一寸之を御目に懸ます、云ふと氣の早ひ江戸ッ子は　甲「オヽ、何だ〳〵、是たから俺ア厭だてへんだ道中は、誂へもしねへものを無暗に持て來る奴かあるてへ、俺達の喰う丈の物は澤山誂へて置いたのに、餘計なもの持て來て何た啟

府あたりでは其んな風の惡い事アしめへと思つたのに……　下女「ヘエ是はお詫へではございません、アノお隣座敷に貴郎方より先に來て居らつしやひまして、貴郎方を江戸の御方たと思ふと懷しひから近つきのため是を持て往け、何れ後に出てお話をするとをしやひまして、是はお進物でとさひますからお請なすつて下さひまし　甲「ヘエー、隣座敷に先刻から泊つて居る客人が……何だらふ……姐さん何だい其方は　婢「チョイと粋な御方でございますよ、若い奇麗な御方で　甲「粋だね何だか其んな事が俺に分るものか、ハテナ、見ず知らずの方が俺達に斯んな立派な着を張込んで爾うして後から近づきに來ると云ふのは分らねへが、と一人か二人も今迄の剣ひとは違つて俄に考へ出して、スルト年嵩の大工の熊吉が　熊「オイ〳〵竹エ、此奴アうつかり貰ねへぞ旅賊かも知れ

ねへから、俺が今度道中へ出る時に芝の伯父さんの處へ往つて暇乞をしたら其時伯父が云ふには、俺も度々道中をしたが、手前達は始めてだから威張て行くのは宜いけれども道中には旅賊と云ふ者があつて、馴々しく資本を入れて人に近づきになりたがる、爾うして旨く此方の物を吸上げる算段をするものだが、夫が手前達の目に旅賊と見へるやうな仕事はしねへ、チョイト見ると粋な身裝をして虫も潰さねへやうな顔をして意地の汚ねへ奴にア喰物を宛行つてソロ〳〵仕事に掛る、旅賊に捕捉まつたら犬に「ダニ」がかつたと同じやうなもので何うしても取れねへとよだから氣を注ろと爾う云つたが、先刻手前か餘りポン〳〵大仰な事を云つたから、旅賊が聞附けて先へ廻つて進物あんぞを寄越して此方等のあけなしの路用を巻上けやうと云ふ算段をするのだちうせ　乙

ぢやア何うしやふ　甲「何うしやふたつて、氣丈しやアあ　乙「氣丈したつて仕様がねへあ、言はゞ怨靈に取付れたやふなものだから丙「困るあ、後へ歸る譯には往かねへお伊勢様の御札でも持たなくッちやア、と大工の熊吉左官の久太郎、家根屋の鐵五郎の三人今迄の勢ひとは打つて變つて俄に萎れ反つて仕まつた所へ、治郎吉が障子をがらりと開けて　治「御免下さへエー、と這入て來る姿を見ると薩摩の變り絣の單衣、其頭の事でありますから八反の白ぐけを締て上へ唐桟の細襟の半纏をチョット引掛たは、夕景の冷風を避ける爲めでございませふ、頭はお約束の五分月代、土地の髪結に無闇に剃込まれるのが厭だと云ふので大坂を立つ時に月代を生した切、贅澤お頭に梳上げて、はゞ先が一寸左へ曲つて居るといふ當今あれば尾上菊五郎でなければ出來ないといふ勇み肌の江戸

ッ子風去ながら愛嬌は溢れるばかり手には銀鎖の莨入を提げて治「皆さん御免あせへと、餘りお懷しいから失禮を顧みず詰らん物を差上げやした、お近づきにありてへと思ひやして、皆さんは何日江戸をお立ちでございへした、三人の奴は片ッ隅へ固まつて仕舞ひまして、治郎吉の顔をヂロ〳〵見て居たが　鐵「ヤイ熊ア、何とか云やアな、エ、オイ、大工の熊吉は據ろなくモヂ〳〵しあから　熊「エ、是は親分さんでおざへすか、お初にお目に掛りやす、唯今は私共に御無用にあせへませんで結構なお肴を澤山に有難うございへすか、是は何うも申かねた義でございへすか些とお目鏡遊ひでございへせふ、私共に御目をお着なさるてへのは誠に情ねへことでございへす、私共は全体口から先へ產れやしたから、ポン〳〵大層な歎を吹きやすが有様は臆病者なので、ナカ〳〵お見込みおすつた半分の仕

事も出來やせんよ友達から些とづゝ餞別を貰つて江戸を立ちやしたか、金比羅樣の御札迄とは往かずとも何うか伊勢までは往きてへと斯う思ふつてげすか切望一ッ私共丈はお見逃かし下せへ、やして外に又好い種子もでざへせふから、其方に切望願ひたいものて、ヤイ久太郎手前も能くお願へ申せ　鉄「エ、唯今熊兄イが申した通りでございまして鴻の池を伯父さんに持たやふに、ポン〳〵大仰な事を云ひやしたか、實ア錢あんぞ澤山持て居るのじやアでざへせんから、親分切望私共はお見遁がし下せへやア、之を失笑す程可笑かつたがアツト堪へ、故意と面に怒つたやふに見せ　治「夫ア何うも大きあるゞ見遊ひで、夫しやア何でけすか、吾儕が何か遣物を差上げたは、之を花車にして何かお前さん方の懐中に目を掛る旅賊だらふと云ふ御嫌疑かテ、何うも夫は迷惑な事ですナ、エ、若

し其んなお前さん方に厭な丁見を起させやふと思つて、ワザ〳〵近づきに參つたのじやあせへん、吾儕は長年の間上方へくだりを歷遊て今度久振で江戸へ歸へる所だか、威勢の好い江戸のお方、懐しい三人連ポン〳〵大層な事を云つて居るから、アヽ江戸衆がアツ子で上方へ往つちやア隨分馬鹿にされるだといふから上方の調子もお教へ申たく、吾儕だッて二人や三人心安くしたものもあるから、所へ手紙でも付て上げたら大きに都合の好い事もあらふし、又江戸の話も聞きたいと云ふ所から失禮を顧みず進物を持つてお近づきにならふと思つた來だが爾う訝しく取られちやア面白くねへから止しやせふ、大きに惡い事をしやした、切望御免なすつて下せへ、吾儕ア其んな怪しい者じやアございません、江戸の遊人で治郎吉といふものだ、長へ聞上方に居て碌な事もして

やせんでエしたが、大坂の藏屋敷の部屋〳〵から兵庫から藩州路の顔役衆とも懇意にして江戸ッ子だとか、東男だとか、木に造とか何とか言れて、些とやそつとの友達も出來やした、治郎吉てへケチな破落戸でげす、お前はん方の懐中に目を懸るやうな怪しいものじやアねへ、厭あら止してお呉んなせへ、世間に聞こへちやア吾儕の身分に除りやすから此方でお斷り申やすよ、途法もねへ、人を旅賊だなつてッて、本當に好い面の皮じやあねへか、少し樣子が變る　熊「誠に何うも頓でもねへあとを申と、熊吉は弱々怖氣を生じて　熊「誠に何うも頓でもねへあとを申しやして、切望まア御免なせへし、ヤイ皆謝罪れ〳〵チヨイとお見懸申た處が只の方じやアねへ、何でも顔役衆に違ひねへのだ、お詫をしろ〳〵、云はれて久太郎鐵五郎の二人もモヂ〳〵しながら久「ドウもまア大兄お腹も立ませふが勘辨して下せへやし、全体此

熊吉の野郎が悪い人で、芝の伯父さんの家へ暇乞に往つたら、道中には旅賊てへものがある氣を付ろと斯う云はれたもんでエすから旅賊てへものは吾儕共は見る事も聞いた事もねへから大きに心配しやしてテ、鼬が血を吸ふやうに人の金や何かを吸上げるのかといつたから、頓でもねへあとを申やしたが切望まア御勘辨なすつて……　治「左樣事が分れば何も吾儕は文句を云ひやせん、夫じやア旅賊てへだけの嫌疑を晴らしてお呉んなせへ　久「何う仕りやして、御人体お人柄にも依たものだ、サまア親方此方へお通入んなせへまし、オイ姐さんモウ一枚座蒲團を持て來て呉んれへ、親方何うも結好なお肴を澤山に有難うごせへやす　治「何ういたしやして誠に失禮で　熊「此んな失禮なら誠に結好で、と是から打解けて段々盃が廻つて話をして見ると根が江戸ッ子同士、治郎吉も

厭味といふものが少しもない、三人の職人達も大きに降參を仕ました大坂へ行つたら何所所へ往きおさい、手紙を附て上げやふ江戸の光景は斯ういふやふに成たと云ふ故郷の話を聞き次郎吉も悦び、彼此して居る裡に日は暮て灯火が点く時分となりました、此時次郎吉が　治「何とお前さん方三人は業平朝臣の色修行を真似て、上方の方へ逆寄せに出かけ、婦人の相場を狂はせるてへあを仰しやつたが何うでエす、色の相場を狂はせる手始めに、今夜は此駿府で名の高ェ二丁町を一ト回廻つて女の好い家があつたら乘込んで一ト汗かいてお歸りなさるお氣はありやせんか、吾儕もお交際に出掛やせう失禮ながらお前さん方は長の旅を抱へた身体吾儕は江戸へ歸へる身の上、途中で儲けた泡沫錢も些たァとせへますから、五両や十兩使つたつてお前さん方にァ御迷惑を懸ね

へが何うでエす、お交際なせへませんか　鷹「何うも夫じやァ濟みやせんネ　治「明日の朝持た振られたに拘らず、皆さんは駄つてンーッと歸れば夫で宜い、跡の處は一切吾儕が引受けやすから　久「夫は何うも濟みませんが、爾うお話が極まつたら早速お供が願ェてへものでと江戸ッ子三人は俄に勇氣が付いて來る、是から宿の女中を呼んで浴衣を借り貸下駄を四足、當今とは違つて呉物が來る抔と云ふ贅澤もおく、僅の荷物は皆宿へ預けて、四人の東男がナリと万屋を出かけ、傳馬町を跡にして是から新通へ掛つて來て、新通六丁目は御承知の通り二丁町昔時駿府大納言樣の時には七丁町であつたのを江戸吉原へ五町引けて殘りが即ち二丁町娼妓を花魁と唱へ殘らず相當の花魁名を付て居る、けれども其頃大店は僅か十二軒殘餘は殘らず局店即ち切見世、まだ其時分は別段に

藝者といふものもなく常盤津の師匠又は清元の師匠抔が道入て藝者の眞似をしたものでありまず、只今四人はブラリ〳〵と浮れながら彼方此方を素見して丁度今小松屋の前まで參りまするとは是が江戸吉原であるなれば玉屋山三郎の妓樓とも云ふべき二丁町第一等の小松樓、家屋の構造も一ト際大きく娼妓も大勢居ると見へて、綺羅美やかに店を張て居る、四人は蟋蟀の籠に止まつたやうに格子に把まつて華魁達の顏を穴の明く程見て居りましたが

熊「ウム成程美人が殘つて居るア　久「爾うよ治郎吉がチョイと目に着きましたのはお職の座に居りました、黒繻子に金糸で松の縫のある襠を着て居た年齢十八九、廿才位に見へる、此邊の娼妓には珍しい美人、横から見ても縱から看ても頗る代物であるから治郎吉が傍に立て居た若い者に向

ひ　治「オイ若エ衆　若「ヘイ　治「アノ松の襠を着て居る華魁は何てへんだイ　若「エヽ、彼は松山さんと仰しやいまする手前方のお職でございます　治「ウム松山さん、アヽ爾うかい今夜友達と四人連でお前の所へ登ると、松やまと、聽いちやア慾張つた事を言ふやうだが、アノ華魁を俺ん所へ出して呉る譯にア往かないかへ　若「ヘイ夫はモウ思召次第で宜しうございます爾うありますれば華魁も嘸やお喜悅でございませと、云ふと此松山と云ふ華魁が格子の外で若い者と治郎吉と何か話をして居るのをチョイと見ると、此華魁狡猾といふ程ではないが、怜悧な性質と見へて四人とも今夜は此家へ上る客に違ひないが宿屋の貸浴衣の上へ細襟の半纏を引ッ懸て居るアノ人が吃度頭分であらう同じあとあればアノ人に買はれたいと氣が附いたから　松「チョイと長助どん　長「

ヘイ　松「其御方は爲不知て居るんじやアすよ、此春一度吾儕の所へ來ゑした事がある、外の家へ行かつしやるなら仕方があいが、其御連中の御方ならばお前間違ひあいようにしてお呉よ、斯う一言針を刺した　長「エー、と華魁はお目が高うおざいます此春一度御入來あすつたことがあると云ふ事で御目が高いから店に座つて居らしやつても直に御存じでます、お登りなりますなら、お間違ひの種子でげすから、切望松山華魁を願ひたいものでございます治郎吉は些とも覺へはあいが　治「是は華魁が俺を客に仕やふと思ふのだナ、と思つたから、己惚の強いは人間の常心嬉しく思つて居る、外の三人は好いのが居たらばとキヨロ〳〵見廻して居たが　熊「エ、オイ久太ア、此お職の松の襠を着て居るのを除くと、餘はズーッと役者が下がるせ、立女形の前で入ちせられませふばかり

揃つて居やアがるぜ　鐵「オイ〳〵向ふの方を見や、間離に三年壁八年到頭お職になりかねる、と云ふ珠が殘つてやアがる、まア松葉だナ　久「ウム、俺もまア爾うだナ　熊「俺も松だ、と三人頻に松の襠に目を當めました　熊「オヽ、若エ衆此四人連はお前の所へ押上がるんだ見立て上りてへが、アノお職の松の襠を俺に出して呉れ、後生だから　長「エヽ、折角の御注文でおざいますが、松の襠を召して居らつしやる華魁はモウお極まりで貴郎樣のお連の此御方樣へ一遍お出あさつた事がありまして今晩はお裏になりますから、切望外のお子さん方を御見立を願ひます　熊「エ、夫じやア彼の松の襠は治郎兄イが一遍買つたてへのか爾うかい、ぢやア仕やふかねへから諦めやふ　鐵「俺も松の襠をと斯う思つたんだ　熊「何だ鐵の野郎まで生意氣に、松は治郎兄イに極つてると斯う云ふのだ、松

の冠だ仕方がねへ、外のにしろィ、併し松を除ちやア外に好いのが無へな　鐵「無ければ仕方がねへ、アノ胴二ーアノ眞ん中に居る華魁だナ鹿に紅葉の觀を着てゐる　熊「其んなのがあるものか　鐵「だッて能く見ろ、鹿に紅葉だアな　熊「ナール程、俺ア其次の赤マンマに野猪の着物を着てエるのに仕やふ　若「エへ、、其んあのはありません、御戯談ばかりをしやりまして、エへ、、何うかお登りを願ひたう存じます、何のお子さんでも御見立を　熊「大兄に松を取られちまつたからお前の方で宜しくお頼み申しやすよ　若「へイ、じやア、切望お登りを、お客樣だよ　○「アイー、と云ふ、トン〳〵〳〵と登りました（演者伯圓も最早年を取りまして若い内は隨分放蕩もいたしましたが、只今では二丁町は愚かあみと、現在己が住みまする、東京の吉原も洲崎も何所が何うだか遂に見る事もございませ

ん、然らば當今の青樓の光景抔は夢にも存じませんが、此話は今を去る事三十年前の編輯に係るものでありますから、自ら青樓の光景何も古風でございまして、當今の粹家と云はるゝ偖先生の御目には定めて抱腹絶倒お笑の種子にある事もありませふか、其所は老人のことゆへ、流行に遲れました所は宜しく御海恕の上御讀分けの程を冀ひ上げまする）

さて四人は二階へ揚ると先づ見通しへ案内を致しました此所を引付と云ふ、鴇母と若い者か何か耳打をすると鴇母が　鴇「オヤ爾う夫じやア松山花魁はお極まり、爾うですか、お目か高くッてお仕合せ、夫でないと瞞着される所、アハ、、夫じやア除の三人は皆お初回で直にお引付　……。是からして下よりスッド昇つて參りました松山が、お裏であると云ふのだから一番先へ昇つて來て次郎

吉の側へビッタリ座つて　松「お前さん本當に酷いよ、アレ切たア……次郎吉も身に覺はあいか、口を合ぜて　治「アレからは、遂忙しかつたもんたから御不沙汰にありやした、何うも何とも申譯かない　松「宜うおざいますよ、後に散々いぢめて上げますから　治「エヘヽヽ、切、望いぢめてゐ呉んなせへやし、三人の江戸ッ子は此体を見て　鉄「ヘン、旨エ情交でナ、畜生め、オイ此方等は何うしたんだと久「ヤイ〳〵　此野郎大仰な事を吐しやアがつて、御馳走で來やあがつた癖に　鐵「ナニー、外飾の場所だ、御馳走だなんとてやアがつて、手前も矢つ張御馳走じやアねへか　久「ナニー、御馳走か何うしたと　若「エヽ、皆さん切、望此方へお引付を……、ヂロリと見ると廊下へ娼妓か並びで居る、中腰に成た三人は口か惡いから　久「コー見や〳〵出て來やアかつた玩具箱を引ッ繰返したやうだせ　鉄「ヤイ〳〵其んな惡口を云ふと好い事ア無へよ往生しろ、鄰に入ては卿に從へだ　鐵「爾うか、何うも美しいナ、お姫樣が揃つたやうふだぜ　熊「夫じやア餘り酷評や　若「ヘイ貴郎樣、ハイ貴郎樣、ヘイ貴郎樣　鐵「極まつてらア、若ひ衆大き」に御苦勞　若「ヘイ花魁お召換を と花魁三人ズッと立まして　久「ヘーお召換、別に着る物もありやアしめへ、治郎吉が　治ヲイ鶴母衆、お前切望宜いやうにお茶屋の方から萬端お頼み申すよ　鶴「ハイ、長助さん直にお肴を……是から大臺が這入たが、喰物が少あくつて淋しいと云ふので、ドン〳〵云附る、常盤津の師匠が來て座敷を取持つ、三人の江戸ッ子は景氣附いて騒ぎ出したが、松山と治郎吉を番新が案内をして松山の座敷へ行く、三人の奴等は羨しく思つて居ると、三人の娼妓お揃て來て片隅に座り、物をも言はず三人が色々戯をするのを見て居

りました職人三人は氣が揉めるから　久「オイ治郎兄イの花魁はチヤホヤ色々な事を云つてるのに俺達三人はサッパリ顔も見せねへヤ　熊「ナニ初回だから仕方がねへヤ、ヤー向うの隅の所に三人來て居らア、ヲイお前達夕暮の蝙蝠見たやふに壁に附着いてるが、些と離れ〳〵に此方等の間へ這入たら何うだイ、鰯の目刺か上潮のダボハセ見たやふに一ッ所に附着いて居ねへでよ、まア花魁一盃申上げやせう、まア初の方からいよ〳〵お近ずきにありやせす何分心易くお顧み申やす、華魁何とか云つてお呉れなせへな、鶯の初音を一ッ聽てへもんだ、花魁お前の名は何てへ云たイ　花「吾儕かい　久「チーヤ、ヲヤ、鶯の初音が吾儕かいと云ふ御託宣だ、お前よ　花「吾儕小紫　久「大層な名を附たナ、小紫だとよ、何かエ、オイ小紫てへのは樓八を浮氣にして目黒へ比翼塚を殘した吉原の小紫

かね　小「吉原は吉原だが、問屋場の向ふの吉原サ　久「アハ〳〵東海道の吉原の小紫さんだア有難へ出來て居やアがる其次なア鐵の花魁だ、お前の名は　鐵「吾儕白玉　久「鐵のは白玉だとよ、白玉もねへもんだ、寒晒蜀黍團粉見たやうな面アしている癖に、問屋場の向ふの吉原の小紫に、寒晒の白玉か、夫から其未座に坐つてる花魁は　○「吾儕薄雲　久「ヘン、水戸の煙草見たやうだナ、本當に妙な奴等が揃つてやアがるな、と散々嘲弄したから、花魁三人は腹を立て○「エレ〳〵おとましいとんだよ」と云ひ棄て三人の花魁はスット立て廊下へ出て行つて仕まひました、三人の江戸ッ子は氣を揉んで　久「ヲイ若ェ衆　若「ヘイ今日は有難う存じます　久「何もあるんじやアねへよ、少しお前に聽く事があるんだ、通詞が無れりやア分らねへんだ、今此方等三人に花魁が「エレ〳〵おとましいとんだ

と云つたが彼ア何の事だ此方等を隠語で何か悪く云つたんじやアねへか　若「何う仕りまして決して差様な譯ではありません、貴郎方が花魁を御嘲弄しあそばしたので「エレ〳〵かとましい」と云ふのは「アレ〳〵口の悪い人」だと斯ういう事て、是は駿府の方言でございます「おとましい、と云ふのは「騒がしい」と云ふ事で　久「成程聞れを聞けば有難ェや「エレ〳〵おとましい」か「エレ」と云ふのは人が悪いてへおとか　若「イエ貴郎方が悪い人と云ふのではありません、江戸の吉原抔で「お前さんは本當に人が悪うございますよ」と云ふのと同じやふなものでや　久「成程何うも是ア通詞が居なくつちやア些とも分りやアしねへ、又後にお出、一盃上げるから　若「ヘイ何うも有難う存じます　久「アヽ〳〵「エレ〳〵おとましい」話だと到頭其晩は三人とも振られて仕まひました、

夫に反して治郎吉は松山の廻建したる屏風の内に居て圖らずも思ひ寄らざる程の懇が無常と變し昔話があると云ふ此一段は師う、

第七席

さて其次の朝は三人の職人かまだ行先も遠いと云つてソコ〳〵に暇乞をいたし、次郎吉に一禮を述べて二ケ町の曲輪を出まして、跡には一人殘つた次郎吉が細雨も降るし頭は重し、モウ江戸と云つても僅あまとたから緩くり遊んで往かうとグッスリ一ト眠入いたしました、此間に松山は下へ降りて風呂へ這入り湯上りの薄化粧露の照添ふやうな打拵となりまして、昨夜の衣裳はサラリと變つて總て江戸風の衣服に衣換へ、靜に建廻したる屏風を開け

松「モシ次郎さんとやら、お目が覺て居ますか　治「イヤ花魁かい野暮のやうだか居續けをして誠とに御厄介になりやす　梅「イエお連の衆は皆歸つてお仕まひあすつたのに、お前さん一人殘つて居てお呉んあさる吾儕の身に取て此んな嬉しい事はございません、吾儕はお前はんに色々お話申たいことがありんすノ　治「イヤ吾儕も花魁に些と聽たい事があるんだ、昨夜は酔つてたし、到底今日一日厄介に成て緩くり聽いたり話を仕やふと思つて、ソレデ今日は流連と極めやした花魁早逃なからお前にお聽き申していのは昨夜の話ヒやアお前は江戸ッ子だと云ふか、夫は〳〵何所へ出したッて江戸ッ子に違エねへ、言葉跳だつて大概分かるが、失禮おがらまア何ういふ譯で此土地へ來て居ふさるんだへ　松「御親切に有難し本當に御親切らしい御方と御言葉に甘へて話らない話を

申しましたか私は江戸の下谷の長者町郡内屋と申す小さな質屋の娘でございます　治「ハー下谷の長者町、爾うかい質屋のお孃さんが今の身の上に成て居るには何ういふ譯と言はすと知れた十六七の後前見す、無分別の浮氣から思ひ合つた情夫に連出され、其情夫のために苦勞をして遂に駿河の二丁町、浮川竹へ沈んだと云ふやふな本讀かね　松「誰でも爾ういはつしやるのは當然でありんすが其色氣を棄て仕まひ、語るも因果は昔話治郎さんとやら御退屈でもありませふが、一ト通聽いて下さいまし、私が丁度十三の時自分の家から火事を出し、近所を燒ひて土地にも居られず、僅の殘るお金を集めて阿父さんと私と一阿母さんは私の幼稚ときに死に別れましたから、寧そ阿父さんの故郷へでも行つた方がよからふと山崎で負笈の古いのを買求め、道中人目に立たんやうふにと

阿父さんは六十六部、私は巡禮と姿を變し普陀羅倶や岸打つ波の御詠歌も漸くに覺にて故郷を跡に旅の空、阿父さんの故郷は甲州の郡内と云ふ所江戸を立ちて足弱の小供ゆへやつと三日目に來ましたが小佛峠でありますが、時は極月初つ方、峠へ掛つた昔日は大雪で、と語る裡に治郎吉は個個をして聽いて居たが、思はず蒲團の上に起直り　治「エ、小佛峠の大雪、ウムー……お前か十三……爾うして花魁今は幾歳だへ　松「お羞うしでざ升すが二十二で、治郎吉は指を接て　治「成程〳〵小佛峠、丁度十年後前だ　松「エ、モー治郎さん、何か此事に就いて思ひ當る事でも……　治「イヤ別に思ひ當る事もねへが、十三前後は俺ア幾才だッぴと考へたらまだ十六の赤童の時分成程其時分に雪の降つた事があつたか其んな事ア忘れちまつたか、何も仔細はないのだ夫からエ　松「爾うすると何

所から出て來たのか知りませんが三人の旅賊が、阿父さんの懷中にお金のあることを知つて、其金を出せ、イヽエーお金を取られては何うする事も出來ませんと阿父さんが爭ひまする裡に旅賊が三人掛つて無理に阿父さんの懷中から胴卷を引出し、手拭で喉を締め到頭阿父さんは絞り殺され恐ろしい雪の積もつて居る谷底へ投り込み、咄嗟と云ふ間に私を捕へ、小娘ではあるが、是から寄つて念佛講と荒呉男に取卷かれ此上辱をかいては仕やうがない、寧そ一ト思ひに死んだが增と阿父さんを突落した谷底へ一生懸命に私は飛込みましたが一旦は死んで仕まひました、と語らふ裡に松山は涙に暮て聲も立かねました樣子治郎吉は手拭もて涙を押拭ひ　治「さては其時の巡禮の娘は此松山であつたか、小佛峠の辻堂で、思へば十年前の昔話、其涙の種子の三十両は、マヽマと此方へ

卷上げて三人の旅賊を思ふ存分懲しめて、仇敵は取つてやつたやふなものゝ、手は下さずとも其金は、此方の榮燿に使い棄て濟まへ事をして仕まふた、併し十年經過ば無常が懸、圖らず駿河の二丁町で逢つた女の素性を聞けば、アノ時の巡禮であつたか巡る因果は十年越し、ハテ世の中のことゝ云ふものは不思議なものだナ、と思はず知らず無常を感じホロリと落す一ト雫、其心根は知らねども松山は治郎吉の顏を覗き込んで　松「何うも御退屈でありませふ、折角遊びに來なまして、お連の衆も歸いんなましたのに、お前は一人居殘けをしおましてお嬉しい首尾も願。みず面白くもおい昔話治郎さんモウ是で止しませふ　治「イヤ華魁止すにア及ばねへ、今吾儕が涙を溢したのは餘り痴漢やふだから、欠びに誤魔化したが實ア欠びしやアねへ眞の涙だ退屈したと屈遠へて止めやふと

云つたッてナカ〳〵止められない、夫から跡の筋を聽きてへ、ソコでお前が阿父さんを投り込まれた谷底へ飛込んだのが何うして助かつたのだへ　松「サア其事でありんす、其夜明け方に通掛つた上吉田村の三五郎と云ふ賭博打、私の身体が木の枝に引懸つて居たのを助けて焚火を拵へ、身体を暖めて漸く蘇生りました、夫から一伍一什の話をば私の口から聽きまして阿父さんの死骸を漸く探し、モウ氣旦が切れて居ましたから、乾兒に吩咐て或お寺へ葬つて立派に墓標を建つて呉れ夫から私を自分の家へ運て來て否應なしに養女にされと云ふに任せ、三五郎の娘に成て居りますと三五郎の後添でお熊婆と云ふ母親がありまして夫婦で私が成長の後は喰物に仕やうと云ふ相談、丁度私が十五の時三五郎とお熊が話合で此二丁町へ連て來て私の身体を八十両で賣り、爾うして

國へ歸りましたが、十六の時から名を松山と耻しい苦界へ沈んで勤めの身の上、また其上にも三五郎とお熊婆の縁が切れず浮む瀬もない私の身躰寫に次郎さんお羞しい話でありますが推量してお呉んなさい　次「成程聞けば憐れお前の話推量どろか吾儕は親身に成て聽いて居た、夫ちやア今でも其三五郎夫婦が、矢ッ張縁が切れずに……　松「ハイ、夫婦変り番こに十日目五日目に來ては五兩貸せ十兩貸せと云ふ無心、吾儕に相當の客人が出來て身受けを仕やふとなると、何日でも三五郎が邪々張つて、千兩寄越せ、五百兩出せ親子の縁切あれば五千兩の金が慾しい杯と云ふ所から、私にまで愛想が盡きて出世が出來す、又二度と三度重ねて來るお客があると、其先へお熊婆が出掛て行き、コタハリを附て無心を言ふもんですから、是は大方親子共謀になつた私まで憎くなり、夫ゆへ初

會はかりて馴染み客は一人もありません、是では到底生涯浮む瀬はありませんが　次「成程爾うゆふ譯じやあ到底肩の抜けねへ始末たが、シテ其三五郎と云ふ人は幾才位の男だへ　松「モウ六十近い老爺ですよ　次「お熊婆さんは　松「是は五十許で　次「ウム……吉田といふ所に居るのか　松「ハイ富士の素走と云ふ所の先である　次「夫ちやア値か一日か二日路、度々無心に來るのも道理だ、ア、何うかしてやりたいもんだナ、何しろ其三五郎夫婦と親子の縁を切て仕まあなけりア生涯浮む瀬がありやアしねへ　松「ハイ、御察しの通りであります　次「入らざるお世話のやうだが俺が茲に四五日泊まつて唐る内に、若し其三五郎なりお熊婆なり、那方でも來たなれば十分掛合つてズッパリ親子の縁を切てやらうチットやソッドの金あれば何うが出してもやらふし、爾うしてお前

の身躰が樂になるやう俺が計らつてやらう、之に就ひては能々緣の深いお前の身躰、其理由は今は言はねへ、何れ委しい話をして聽せるから、何うしてもお前の身躰を俺が世話アしなければならねへやうな因緣があるのだからまア安心してお居で、果報は寐て待てと云はア惡い跡には好い事があるもんだ、否でもあらうが俺を此處へ四五日置いてお呉れ　松「ホンに嬉しい其お言葉樣子は何か知りませんが、私の方でも昨今の御方のやふには思はれません已惚の事を云ふやふですが、何うか末始終御倒にも居たいやうな心持がしまして……

次「夫ぢやア華魁及はつあがら力に成て上げやうと尙もしめやかに話の中、頻に降來る秋雨が取持つ緣か遠くて近きは男女の情勤め離れて實意を盡す、次郎吉も棄難き者と之を愛し是より思ひも寄らず此曲輪に流連をして居りましたが里の金には大山も盡きるの譬へ、松山はモウ萬事素人了見に成て、直此の松山の向ふに玉木屋と云ふ揚屋がある、其家の亭主が心切者で、松山の身の上の事に就いて彼此心配をして居る義俠の男であるから、其玉木屋德右衛門を賴んで次郎吉を二階の奥の六疊一と間、空氣も好し、富士の高嶺を眼の前に見るといふ結搆な座敷、之を次郎吉が當分の住居として松山が折々首尾して逢ひに來るといふ旨いす法でありますす、

さて昨日と過ぎ今日と送りまする中に丁度八月の廿三日の事でありますす、今日は朝から松山が己の身躰を仕まつて例の玉木屋の奥二階でチン〳〵鴨の小鍋立、身の越し方行末を色々相談いたし何れ江戸へ連て行夫婦にから夫から後は斯してアーしてと尙ほも末々の相談を親密にして居りますす

丁度正午少し下かる頃階下から女中が裏階子をトン〳〵上つて來ましてお嬢「モシ華魁ェ、松山さん　松「ハイ、何か御用でありますかへ　嬢「華魁上つても宜ふございますか　松「宜〳〵なくッてサ、晝日中何も御遠慮はありませんよ　嬢「夫でも若し……　松「何だね若しなんテ、何うしたノ　嬢「華魁來ましたよ、と下女が顔を皺めるから　松「エ、來たへ、アノ吉田から　嬢「ハアポッと松山は濁息を吐いて　松「本當に來なくッても宜いのに那方……　嬢「老爺さんの方でございます　松「仕やうがないね、また大方無心だらふ、何處に居るノ　嬢「階下の店に居ますが、家の旦那もお内儀さんもアノ三五郎に逢ふのは嫌だと云つて障子の蔭に隠れて居ますの、だものですから老爺さんは貴盃と首ッ引をして苦い顔をしながら是非逢ひたいと云つて居ますノ　松「爾うかい、仕方がないから次郎さんチョイト往つて來ますよ　次「華魁旨〳〵やらなくちやア往けねへぜ、何ういふ理由か知らねへが、都合に依つちやア俺が飛出して旨〳〵談判を附てやるから安心して居ねへ、實ア其三五郎の來るのを待て居たんだ、例へ何ても婦人のとしやア話が纏まらねへ、亭主から大きに都合が宜いから　松「折角お前さんが御親切に色々言つてお呉んなさるが、ナカ〳〵三五郎と云ふ奴は酷い惡黨だし、容易にお前さんの手に乘りませんから萬一指を咬へて引ッ込むやうな事があると私が此上悲しい思ひをしなければなりませんから、私が何とか誤魔化して歸しちまいますから、夫迄は出ちやア往けませんよ　次「若旦那にお花でも引かせやアしめひし、出ちやあ往けねへ、あんテ、好いよ俺か方にも了見があるから　松「夫じやアー寸往つて來ますよ、と是から松山が二階をドン〳〵下りて參り

まするとも野狐辻の煙草盆を引寄、誰も持做しに出るいから三五郎は煙草をパクり〳〵と呑んで居る、三五郎の打扮といふは八月の下旬ゆへ刷毛目縞の單衣に目倉縞の股引脚半小倉の帶、其上に半合羽を着して胴鐵作の長い刀を傍に置て、狩猟の上腮の火はたきの附た伊勢の壺屋の煙草入巾鍋鎖、百服詰の竿張の烟管でパクり〳〵と京唐爪が吹矢を喰つたやよな面をして年頃は五十七八面と頭との境界が分らぬ總楽鐵、後の方に少はけな髭が附いて居るのは、丁度金盥の中に目高が遊んで居るやうな塩梅　三「ヤア花魁大きにお楽みのお邪魔をしやした　松「ヲヤ阿父さんですか、能くふ出ふさいました　三「エへも餘り能くも來ますめへが、急に於老婆と其所まで一緒に來たが口喧しくッて嫌だと云と思ふから大門際に待たして置やした、今日は些とお前にお頼みがあつて來た

んだが、毎度の事ゆへ無理でもあらふが、些とばかり金の要る事があつて來たんだが二十両許何うか働いて貰ひたいんだ、花魁其お頼みで來ましたよ　松「阿父さん折角のお頼みではありますが、モウ廿両はさて置て、折羽詰まつた吾儕の身躰、漸う盃を越へて仕舞つた位あんですもの、誠にお氣の毒ですが、今日此頃は酷く都合が悪くでざんすから、モウ少しもお金は出來ませんよ　三「コー〳〵出來ねへと云へば出來ねへのが金、出來ると云へば出來るが金、駿府二丁町で第一番の小松樓の花魁松山さんだ、二十兩許二階中七軒借をしたッて親の爲めだ出來ねへといふ事があるものか　松「阿父さん夫は餘り無理であります、朋輩衆の物も借盡し、情夫に貢いたと云ふ事もなし、皆なおまさん方御婦夫に御入來の度、何うやら斯うやら耻もかゝせずにお歸しゐてあります、今日と云ふ

今日は二十圓はさて措て仙臺通寶一枚も持ていませんから堪忍してお呉んなさひまし　三「大層な事を云ふねへ、仙臺通寶一文もねへとは、誰に其んな新文句を教はつて來たんだ、何てイ何日もと逸ひ柏子木で湯をかんだやふな愛敬のねへ素振を仕ヤアがるんだ、マヽー分かつた細雨の降るのに幸ひに、玉木屋の奥二階で、眞寢子の昔遊び、何う出來やアがつたナ、イヤサ後俯が出來たナ、三五郎夫婦が來たら斯うしろとお前又智惠を附た色夫が出來たに違エねへ　松「アレ阿父さん申譏云つちやあ往けませんよ、其んな者があるに位あら心配には及ばないが、何と言ふても出來あいのが眞實で　三「エヘヽヽ「知らぬが眞實」頓だ阿古耶た、何でも情夫が出來たらふ　松「イヽエ其んな者はありやあしませんよ　三「イヤ爾うでないの何でも情夫があるに違エねへ、コーレ何ぼ勸め奉公をさせて

も、外から邪魔をして親を粗末にするやうな入れ智恵をした情夫、サ、此所へ出て來やあがれ　松「何、たる阿父さんそんな大きな聲をお出しでないよ、此時次郎吉が二階の階子段に足音荒く下りあがら　治「今其所へ往くから待てッと　松「アレサ往けないよ、治郎さんお前此所へ來ちやあ往けないと云とに　三「何だ〳〵今往くから待て！……大仰な事を言やあがる、サ何所の何奴だ、ド何奴だ、トン〳〵トンと二階から下りて來た治郎吉が、三五郎と松山の間へひたり座はつてグイと見上げた、三五郎も愕然としましたが　三「お前は何だ　次「何だしやアねへ、出て來いと云ふから出て來たんだ、俺ア松山の情夫だよ、花魁の間夫だ　三「イヤ大仰な奴が出て來やあがつたナ、目分の口から間夫だとよ、ハヽー爾うでエすか、始めて御目に懸りやす、吾儕あ三五郎と云ふケチな山猿で　す、併し松

山のためには大恩のある親父で、始めて御目に懸りやす、シテ御名前は　治「俺ア俺ア」そんな人とは近つきに成た事もねへが江戸でエす、江戸の遊人でげすが、少し仔細があつて暫く京大坂を經巡り、今度久振で古郷へ歸る治郎吉てへ、吹けば飛ぶやうな江戸の破落戸だが始めて御目に懸りやす　三「ハア治郎さん爾うでしたか成程水道の水で産湯を使つた丈あつてスッキリとした東男、松山の惣れるのも道理だ此以後とも何分御心安くふ願ひ申やす　治「イヤ餘り吾儕の方では心安くしたくねへ、今聞けばお前さんが華魁に無心を云つても華魁は一文もないと云ふんだから俺が仲へ這入て一聽口を利かうと云ふのだが何うでエす併し阿父さん松山も十六の時から廿二まで足掛七ヶ年の間にア隨分搾つた樣子だが吾儕は是から華魁の惡足に成て飽迄も惡智惠を貸さふと思ふ、併し爾うした處が喧嘩にもならねへ詰り金と云奴なんだ、乃で俺が今五十兩の駒を外してやるから、此以後松山華魁とは親子の縁を切ると云ふ所の書付を一本貼つて呉めへか爾うすれば其後で俺か松山に勸めをさせやふと身受をして女房に仕やふと俺の勝手次第お前のやうな親達が附いて居ちやア何分此末が覺束ねへから否でも應でも俺ア縁を切て貰ひてへと思ふが何うだい、三五郎は之を聽いて　三「成程、了得は關東、男善にも強ければ惡にも強いマゴ〳〵すれば虻蜂取らず、宜うごす吾儕も甲州の強情ッ張だが、年に免じて大負けに負けやせふ、老婆に小言を云はれるかも知れねへが、五十兩で綺麗に親子の縁を切りやせふ、

茲に話が纏まつて三五郎より親子の縁を切たと云ふ書を張らせ治郎吉が一時此處の松山の難儀を助け、其仕返しは駿河國に名の

高い草薙山明神の森なる大楠の洞中に於て、二十三夜の月の出に圖らずも三五郎とお熊婆に出會ふと云ふ劇場あれば暗闇の一トー幕でございます、

第八希

三五郎も名に負ふ惡黨の老練家でありますから、心の中に篤と考へ　三「到底此松山は本當の子ではなし末始終死水を取て呉るといふ事もあるまいし、今までは温和い性來き、長く勤めて居る裡に情夫らしき者も無かつたが、今此治郎吉とか云ふ奴は、ナカ〳〵一トー筋縄では往きさうもない而も江戸ッ子、男振も好し、彼奴も屬魂惚て居る樣子、是ア一層五十兩で縁を切た方が宜からふと決心いたし、ソコで負けやせうと云ふ言葉を發しました、スルと治郎吉が治「イヤ了得は甲州での名代の三五郎さん、能く綺麗に縁を切ると

云ひあせへやした、松山安心しねへ、是から後は二人の親達の無理を聽くにも及ばぬことだ、及ばずながら俺が後見に成てやるから安心して居ねへ　松「本當に嬉しい事であります、治郎さんと松山は氣の毒さうに治郎吉に金を出させるのを心配して居る樣子、治郎吉は常に放さぬ胴卷から、突然ザラ〳〵と小判や小粒の交せ金で五十兩取出して、一枚の半紙の上に載せまして　治「阿父さん夫じやア改めて見てお呉れ五十兩ありやす三五郎は莞爾笑つて三「了得は江戸の大兄だ好い氣ッ腑の男だ感心しやした、改めるにア及びやせんが、まア念のためでありますから、と三五郎は一ト通改めて　三「宜しうございます確に受取やした　治「イヤ確に受取つたは宜いが何の中にも書付一本と云ふ事がある、殊にお前も甲州での惡徒、無證據じゃア後日又何を云つて來あさるかも知れね

へから切望五十両確に受取たといふ證文へ判を捺して貰へてへもんだ　三「折角の思召でせへますが、判抔と云ふものは平素入用の無さねへものだから、三文判の古い奴を宅の硯箱の中へ投り込んで置やした夫ゆゑ茲にア持て居やせんよ　治「ナニ判がねへ夫じやア何うでも宜いから書付を一本拵へて爪印でも捺て貰いてへ、けれ共困つた事には此んな事といふものは、得手後で間違ひのあり勝のものだから、誰が立合人と云ふやうな者を一人頼みてへが、此曲輪に懇意はあし、何うしたものだらう、と了得の治郎吉も途法に暮れて暫く考へて居ると、障子の蔭に居た亭主の玉木屋徳右衛門が　徳「スツパリお話は分かりやした、吾儕で宜くば今日の立合人になりやせう、と障子を開けてスイと出たから治郎吉が　治「オヤ、親方は今日お留守だと云ふ女中の話だつたが……、三五郎も

同じ様に　三「吾儕も茲へ來て松山華魁を呼出した時、玉木屋の親方もお内儀さんも御留守だと云ひなすつたが……、云はれて徳右衛門は苦笑をして　徳「イヤ勝手に就いちやア留守にもなり、都合に依つちやア家にも居やすのサ、まア江戸の親方聞いでお呉んなせへまし、此松山さんの養父だと云ふ老爺さんは大嫌にだから何日でも此老爺さんが來ると留守を使うんです、今日亦た老爺さんの蔭が見たから家内と兩人で障子の蔭へ引ッ込んで居やした、けれども松山華魁の身の上に就いて面白さうな手續又江戸の親方が五十両と云ふ金まで出して親子の名目を切てやらうと仰しやれば、是は立會人のあるなしで今日の相談が纏らねへで、出來ねへ相談になるとあられへとの二ッ一ッだから、吾儕は三五郎老爺抔と一ッ所へ名前を並べるのは些と役不足ですが、詰り江戸の親方

の御安心のため又華魁の末始終の御爲めを思いやすから、諄々いやふだが吾儕が調印をいたしやせう、失禮ながら曲輪には曲輪の法がありやすから、俗文ながら吾儕が案文をいたしやせうから、所で拝りなりにも書なせへ、判はなくとも失念ながら吾儕が証人です曲輪で出來た話あら何所迄も吾儕が出ますから、何卒治郎親方爾う思つてお呉んなさいまし、治郎吉は是を聽いて松山と顔を見合せ　治「イヤ親方誠に御親切な、三五郎どんの証文は兎も角ゐ前さんが立會人に成てお呉んなされア此んな安心事アおぜへませんぢやア何卒御面倒でも案文を……」徳「宜うがす、と事に慣れた玉木屋がサラ〳〵と下書をいたし　徳「サ、チョイと讀上げて見ませう皆さん是で宜うおぜへませふ

入置申一札之事

一駿府二丁町小松屋方にて遊女奉公致居候松山事本名松我等義女に有之候處此度貴殿妻に被成度由にて親子名目手切之印として金五拾兩被下置慥に受納仕候然上は本人儀勤奉公致居候共直に御受出しに相成候共、決して我等方に異存之無候若し又當人儀に就て向後脇々より彼此申出候者有之候はゞ我等早速罷出速に埒明け毛頭貴殿へ御苦勞相懸申間敷候爲後日立會人連印之証仍而如件

文政三年八月廿三日

甲州吉田村
三五郎爪印
駿府二丁町引手茶屋渡世
徳右衛門印
和泉屋治郎吉殿

徳「まア此んなものでございませふ　治「イヤ結構〳〵　徳「宜しい

あら私は調印をします、返す〳〵も此三五郎老爺承と名義を並べるのは些と役不足だがまア仕やふかない是も華魁の爲めだ。三五郎は苦笑をして默つて居る酒蛙突あ老爺だから、處へ徳右衛門の女房が印形を持て來る、三五郎は之を見て　三「イーヤ御内儀さんも御宅なんで　女房「アヽ吾儕も勝手に就いては留守であります　三「エヘヽヽ爾うてエすが、今歸つて障子の蔭から聞ましたよ　三「イエ私にはナカ〳〵斯う徳「サ老爺さん涉前の手で書あせへ　三「イエ私にはナカ〳〵斯う旨くア書けません、エヽ爾うですか、夫じやア何うあつても本人が書かあくつちやアならねへと云ふ事あら引寫しにいたしやせう是から三五郎が眼鏡を懸て鹿角藥の行列のやふな右の文言を書並べました　三「エヽ親方是で宜うがすか、治郎吉は手に取上げて治「ナール程三五郎ぢんも宜い惡黨で昔は長脇差でナカ〳〵幅を

利かせあすつたてへみとだか、御手跡は隨分御美事なもんでありませへやすね　三「エヘヽヽ飛んだ御冷評で恐入ます玉木屋徳右衛門も之を見て　徳「オヽ〳〵柵い手だナ、願くは逃石を打た方が宜からふ　三「皆さんは喧あ事ばかり仰しやると云いなから三五郎は五十兩の金を戴いて懷中へ捻込む、治郎吉は松山に向つて　治「サ華魁、之を御前の守袋に入れて置ねへへ、御前のためにア六箱三畧虎の卷同樣だ、是から後は三五郎ぢんにもせよ於熊婆にもせよ何と云つて來やふとも、親でもあければ子でもない、赤の他人だから安心して御在、松山は右の證文を推戴きまして　松「何から何まで治郎さん有難うござんす、此御恩は生涯は忘れません、又玉木屋の親方御内儀さん宜しく御禮を申上げます、と云へば女同志の事として松山の心根を察しまして玉木屋の内儀が　女房「松山さん本當に

嬉しうございませふ、マア世の中に此んな惡い親と云ふ者はあい而も本當の親でもないに、僅な事をば辞柄にして今迄何年となく強迫られて居たんだが、見るから本當にまア此老爺も厭たが御熊婆さんは尚は厭たよ　徳「詰らん事を言ふな、婦人と云ふものは兎角口が多くつて往かねへ、三五郎は聽かぬ振をして　三「左樣ならまたるや御意の變らぬ内、私はお暇をいたしやせふ、夫じやア治郎兄ィとやら、之を御緣に又御目に懸ることも……　治「イヤ夫は御免を蒙りやせふ、此以後往來で逢つたとて言葉も懸て御くんなさるな汚らはしいから　三「是は何とも御挨拶で……エヽ華魁エ緣が切れて餘計な事を云ふやふだか、男振と云ひ氣象と云ひ而も江戸ッ子此んな好い親方は金の草鞋で探したッて滅多にはねへよ、勤め止りは自墮落だから愛想を盡がされぬへやうにしなさい

松「捨棄つて置いてお呉んなさい、其んな事は吾儕は疾に承知して居ますから早くお歸んなさいよ　三「ハイ〳〵何方へ向いても續穂の惡い事だよ玉木屋の親方　徳「エイ下らねへ文句を並べて居ねへで、金を取たらトットと歸んなせへ　三「ハイ〳〵、お内儀さん大きにおやかましう　女房「知らないよ　三「オヤ〳〵何うも斯う拍子木で謂をかんだように愛想を盡かされちやア仕樣がねへ女中にア挨拶をしめへ、餘り癇に障るからと三五郎は胴鐵作の長脇差を腰に帶びたる儘出て行く時に下女は塩を一ト掴み、三五郎の禿頭へザブリ　三「アハヽ、飛んだ女中の御挨拶だ、併し今月に成て塩花はまだ三度しきやア喰はねへと此老爺は諸方で塩花を振掛られると見へまする、

跡に玉木屋は治郎吉に向ひ　玉「まア親方のお蔭で一段落濟んだ

と云ふもので、松山さん是から後は綴くり飲直すと仕やせふ　松「何だか吾儕は嬉しいやら怖いやらで氣がソヨ〳〵していますよ、オヤ治郎さんお前さん何所か〳〵行くノ　治「ウム昨の日も湯に這入らねへからチヨイと一ト風呂這入て來やふと思ふのだ、夫じやア玉木屋の親方今日は綴起直しに後に一盃やりやすから料理番に爾う云つて何か旨エ物を……　德「心得ました、華魁も今日は身揚りをして治郎さんにタツプリ御禮をしおくッちやア往けませんよ、ぢやア親方今の中に往つてお出あさい　治「デハ一寸往て來やせふ　德「何所のお湯へ……　治「曲輪外の……　德「ハア、其方が宜うございませふ何れお歸りになつたら、私も御招伴に一盃戴きやせふ　治「切望親方爾うしてお呉んあせへ、言葉て治郎吉は手拭を下げてイと立出ました

是から遠見隱れに三五郎の跡を尾けて行き、丁度大門際まで來ると、お熊婆が佇んで居て三五郎と何やら話をして居る樣子、治郎吉は天水桶の蔭に身を潛め小さくあつて聽いて居ると、お熊婆が不承〳〵に　熊「夫じやア阿父さんお前綴を切つたのかへ、金は取たッて詰らねへじやねへか　三「開所には婆さん色々話があるのだ、俺もお前に一應相談を仕やふと思つたが何ぼ曝ア天下だつて男の決心と云ふものもあると云だから、お前に叱られるかア知らねへが其事は綴くり話を仕やふ　熊「爾うかい夫に丁度今吾儕が茲に居たら例の一件が有外旨い報知があつたから、今夜の手筈を色々相談もあるし、何所か開所等に閑部お家が……　三「爾う云へば丁度腹も少し北山だし、夫じやア新通五丁目の江戸屋へ往つて蒲燒の御馳走と酒落込まうかナ　熊「爾うさネ些と位者つても宜

いや、久振で鰻を喰はうか　三「夫じやア爾うよ、と老夫婦の悪黨兩人、物陰にて他人が聽いて居るとは少しも知らず新通五丁目を指して行くと此江戸屋と申すは江戸から此地へ店を出した鰻屋で其頃大層流行を極めた家でありまして、三五郎夫婦が江戸屋へ這入った樣子を窺と見屆た治郎吉が何か胸に思案を定めて同く江戸屋の家へ這入ました　婢「入らつしやいまし、お一人樣でございますか　治「アイ唯た一人です　婢「アノ奥の離室へ入らつしやいまし、店は些と込合ひますから　治「爾うかい　婢「サ此方へ入らつしやいまし　治「姐さん一寸聽く、が、今此家へ五十五六の老爺さんと五十格好の婆さんが二人連て來やアしなかつたかへ　婢「ハイ入らつしやいましたお連さまで……　治「オヅト、其人は何處に居るヲ　婢「矢張離室の二番にお在てございます　治「爾うかぢやア其離室

へ何うか案内をしてお呉れ　婢「宜しうございます、丁度明いて居りますから　治「向ふの人に知れないやふにしてヲ　婢「畏りましてございます、何か理由のあるみと思ひましたから石燈籠の陰を廻つて　婢「此方へ入らつしやいますればお二人さんには知れませんから　治「お前は本當に氣が利いて居るよ、今に吃度御禮をするよ　婢「何う致しまして親方お誂物は……　治「夫アまア何だ、程の好い處を三皿でも四皿でも燒いて小口から持て來てお呉れ　婢「ハイ畏りましてございます　治「お酒は成たけ好いのだよ　婢「合點でございます、

是から治郎吉は小座敷へ飛上かると、壁一ト重隣は三五郎夫婦、此處に半窓があるから二人の談話は手に取るやふに聽こへる、次郎吉は壁を背に負ふて　三「何んな事を相談しやアがるかと耳を欹

つて聽いて居りました、

第九席

お熊婆は高調子で　熊「夫りやア何かい、アノ松山の客と云と奴が五十兩の金を出したといふ　三「爾うサアロリと金を出されたから跡へは引けなくなつた明日の百兩より今日の五十兩てへおとがあるからる前に吒られる迄も俺は取る氣に成たのヨ　熊爾うかい、シテ証文はへ　三「証文の事をおう吐かしたが、其中にも面の憎いは玉木屋夫婦、俺の往つた時にア留守を使やアがつた癖に、息成障子の蔭から芝居掛りで出て來やアがつて其立合人は俺がすると、厭に男達振アがつて、玉木屋が案文をして拔差しの出來ぬへ証文を書かされたのサ　熊爾うかい、夫アお前にア少し不出來だつたよ、併し又好い事もあるだらふ、到底アノ娘も吾倅が腹を痛め

た奴じやアあし、親子と云ふは名ばかりで、仇敵同士見たやふに成て居るんだからまア〳〵　茲等が見切時だらふ、よし阿父さん　三「爾うよ考へれア女魔が十六の突出しの其時から長ェ間お前と俺で强請た金も彼是小千兩、罪滅した、ナア却つて人にやつた方が宜がらふ　熊「本當に爾うだな、けれども其江戸の若ェ野郎てへのは何んあ奴だへ　三「此奴が申た齒の浮くやふな氣障な青二才よ厭に氣取アがつて、エヽ名前は……爾う〳〵和泉屋の治郎吉と吐したが、何でも江戸の遊人だてへことだが上方から歸り掛に亞魔女に引ッ掛つたんだらふ　熊「爾うかい、まア五十兩取て置けば那方の道損は往かない　三「俺も然う思つたから斷念して仕舞つたのよ、時に婆さん先刻チョイト話した例の一件は……　婆「サヽ其事だよ、ウム爾う〳〵丁度今夜だ　三「フムー、シテ場所は何所だ　婆

此方で言つた通さ、明神の森の大楠の洞穴の中へ金五百両相違なく入れて置くと云ふ請書迄も出したとの話　三「夫じやア此方の思つた通に成たナ　熊「併し阿父さんヤー岩淵の悪玉法院も妙な事を考へるじやアないか　三「爾うさアノ法院は通常の荒神様を祈ちらして釜締だノ御祈禱だノと其んな事では小さいから近頃は恐ろしい狐を憑やアがつて、人の女房や娘を病人にして置いて夫から表向加持禱祈を頼まれて何だか下らぬへことを云やアがつて、其狐を落したとか、活神様とか何とか云はれて居る人だか、悪事にア抜目のねへ奴よ　熊本當にな、夫じやア阿父さん、饅を好い加減にして、拂ひを濟ましたら日暮からソロ〳〵出掛るといふ事に仕やふ、

抑も此塲の手續が何ういふ理由かと看客の思召もありませうから、一寸此筋を三五郎お熊の問答でなく別講談といたして御聞に達しまするが、昔時は江戸抔の大都會ではありませんが、少しく江戸を離れた片山里又は御政治の届かぬと云ふやうな僻村に於きまして、其土地に於て極く憎まれて居ることと又は衆人に嫌まれて居るとか云ふやうな大金滿家の家家抔へ火札を貼るといふ事が能く流行ました譬へて言はゝ汝の家は施與もせず天地の神にも憎まれて居るから來たる何月幾日迄には相違なく燒拂うから左樣心得ろ、若し又先非後悔に及ひあば金子何百両鎮守の社とか或は無住の空寺の本堂へ相違なく納めて置け、若し其事を懶るに於ては汝の家を始めとして一ケ村又は一ト郷殘らず燒亡はすから左樣心得ろ」抔と書いてある之を火札と云う、ソコで本人の態愚は言ふも更なり、村内寄合をして　○「お前が憎まれたばつかりで村

内殘らず燒拂はれては大變だ、誠にお氣の毒の譯だがお前此土地を立退いて呉ろ左もなければ馬鹿〳〵しいとは思ふだらうが、部みの通り金をば納める所へ納めるとかして、村内一体の憂慮を除いて貰はなければならない、夫が否なら此所を立退け、と茲に苦情が一ッ起りました時には、否でも應でも仕方なしに眼前〳〵惡者手管に掛ると知つて其金を望みの場所へ持て行つて、やるともなし、捨てるともなく唯茫然と置いて歸るといふやうな馬鹿氣た事が往々ありました當今の人氣から考へますると國に代官もあり、役人もあるから、其筋へ訴へたらは抔と云ふ御念者もありませうが、夫は出來ません、何とされば公けに事を爲して其時は遁れたやうでも犬の糞で何とかの仇討に會いますると、一家殘らず斬殺されると云ふやうな慘狀あきにしもあらず、夫がため齒を咬しばつて殘念

ではあるが訴へて出る事も出來ず、眼前〳〵僞詐、强請に掛ると思ひながら其金を出すと云ふ事があります、誠に馬鹿〳〵しいやうな話だが現に御維新前抔に、世間何となく騷がしい時分近鄕近在にて火札を貼られ、前件に述べましたやうな目に逢つて金を出した者が僅ありましたあとで演者抔も能く知つて居ります、現に文久の年間、天下何となく騷々しき折柄、兩國橋まいへ生首が梟木に掛つたことがあり、世上穩やかあらざる時に、堀留邊の或横濱の商館と取引をいたした大商人の家へ火札を貼り金を出せば宜し、出さねば燒拂らうと云ふ、夫から向う三軒兩隣へ苦情が起つて早速其事を町奉行へ訴へても奉行に於て其所置に苦んだと云ふ事があります、然れば駿河國清水港と云ふ所に廻船問屋の大金滿家神崎屋助右衛門といふ豪家がある、是は松山の客でして、振られあがらも

熟くおつて通つて居りました、然るに此神崎屋は婚女の爲には隨分金を使ひますが所謂有財餓鬼、入る事を喜んで出る事を嫌ふといふ、貰ふものなら元日の葬式でもお斷りはしないと云ふ守錢奴でありますが松山の縁に依てお熊婆も折々此神崎屋の家へ入込んで少し位の無心を申した事もありまする、然れば神崎屋の内外を能く知つて居るから、何うかして五郎夫婦で終始惡策を施こして居りましたが、是はと云ふ工夫も附きませなんだ、

時に全國岩淵に居る惡玉法院蓮秀と云ふ奴、此奴は三五郎夫婦の惡友でありまして彼の神崎屋が清水港で一般に憎まれて居ることを知る處から火札を貼つて見やう、無駄として　三「ウム夫が宜からう、と共謀して、此法院は可なり學問も出來手跡も拙なからぬ

と云ふ處から、厭に氣取て强迫の文を認めました

一汝神崎屋助右衛門、非義非道にして多くの財產を貯へながら貧民に施すことも知らず去年の饑饉の時も此土地に於て相當の施行を出し候に汝は少しも之を惠む心なく、益々貧民を苦む、今や天汝を憎み其家に放火して所有財產悉く燒亡ぼさんとす、然れ共汝改心の上來たる八月廿三日草薙山明神の森ノ神木大楠の洞穴へ金五百兩納置候へは格別の悲慈を以て汝の家は申すに及ばず清水港一鄕を燒拂ふ事を宥恕すへし若し天神他祇の怒りをも恐れず汝此上にも財を呑み其事を爲さゝるに於ては相違なく燒拂うべきものなり、速に返答せよ

斯の如く認めて其末に(天下の有志數百人)として强迫のため連累者が多分にあると云ふことまで知らせたのでありまする、之に依て

神崎屋の一族の者は唯霊へ戰き、何うしたら宜からふと、斯うしたら宜からふと評議をいたして居る裡に清水港の人が殘らず神崎屋の家に押掛て先刻演者が遇べましたる如く、之に迫つて御迷惑であらふが神崎屋殿の此土地を立退いて下さる歟左もなければ駿府町奉行へ訴へるが浮城代へ歎願をすつとも御役人に迫るとも、お前さんが多くの人に憎まれた許で吾倅達が迷惑をすると多勢の者に迫られて仕方なしに後嗅が怖しするから、夫では馬鹿〳〵しいが五百両彌々納めやふと事が決し爪で火を点すやあ了簡の主人も多くの人に迫められ據ろなく金子五百両を白木の箱に納めて大楠の洞穴へ相違おく納めて置きますと表へ請書を賭つて出したと云ふは實に馬鹿〳〵しい話であります、此相談をお熊婆と逸秀が立話にいたして居る裡に三五郎は松山の一件で治郎吉と

應對したものとお察しあつて宜しく御聽分けを願ひまする、

紹れば今鰻屋の二階で其手續を改めてお熊婆から三五郎に話をする、程と笑壺に入まして　三「成程此んな馬鹿氣た事に成て來たと云ふのは本當に運が向いて來たんだナ、併しマア逸秀と云ふ奴もなか〳〵隅にア置けれへ奴だ、惡玉法院とは云ふものゝ此方等の爲には善玉法院だ　熊「本當にさ、阿父さん爾う何日までも飲んで居ちやア嫌かあいモウ日も、暮て仕舞つたが、四ッの鐘を合圖に相違おく楠の洞穴へ五百両納れて置くと云ふのだから定めて法院も出掛て往くかも知れないよ、アンな奴だから先廻りされて持て往かれちやア詰らねへから好い加減に飲んで勢が附いたら餘り人に目立たんやふにしてソロ〳〵仕事の場所へ出掛やふじやアないか　三「夫が宜からふ、がまだ今暮六ッを聽いたばかりだから

其んなに急ぐにア及ばねへヤ、惡玉法院も惡事に掛ちやア振目はねへが、眞逆此方等を出し抜いて先廻をして……　熊「イヤ、夫が油斷と云ふものだよ、斯ういふ事にア得手魔が魅すものだナカ〳〵機敏い奴があるから好い加減におしよ本當にお前は階子上口だから往けない　三「手前は酒を散々飲み鰻を十分に喰つちまつたもんだから其んな事を云ふ、夫じやあお調子の熟い所をモヲ一本やつて止さふ　熊「本當にお前は跡引上戸だよう困る、此話を壁一ト重手に取るやふに聞いた治郎吉が　治「此奴ア面白い話だナ、良し其惡玉法院逆秀よりはモウ一番先を越し、是から直に草薙山明神の杜の大楠、久振での五百両飛んだ定九郎が出來上つた大分調子が好くなつて來たぞ、人を殺さず惱めもせず、濡手で粟の掴取り喜い事が來たつたワイ、と莞爾笑つて治郎吉がソコ〳〵に勘定を濟ませ、江戸屋の家を暗紛れ所何ともなく出行きました、是より草薙山明神の杜の出會ひと云ふお話ですが、一寸一腹いだしまして……」

第十回

抑も駿河の草薙山草薙明神といふのは、昔時景行天皇四十年に日本武尊が東夷征伐の時よりの由來のある靈地でありまして、明神は日本武尊を祭つたとありまする、草薙の御劍抔といふ古事は確か歴史に出て居りますから今改めて鹿爪らしく述べるには及ばぬことと此山の神木だる大楠は神代の昔よりあるといふ大木にして其根方に至りますると、婦女の帶を纏いで十筋とやらで廻し切れぬと云ふ位の楠であると　いふて土地の人も自慢をいたします之に一ッの洞穴がありまして、其中は深々として物凄く始終清水

がヂク〳〵出で居つて穴中は暗黒でありますから誰も這入て見たものもなく、折々此洞穴の中から蝙蝠の大きな奴が出入いたして居るといふ、最も人の懼るべき所を屑とも致さぬのは悪黨の常であります、

時は二十三日の夜に入て亥の刻頃まだ月も出ぬ宵暗を幸ひに頬被眞深にいたした一人の若者甲斐〳〵しくも彼の洞中へ入りまして諸方をば頻に……芝居狂言でする暗闇の如く彼方此方を探つて居るは別人ならぬ治郎吉でありますの内証話も外れたか知らん、餘り旨過ぎた話だと思つたが、何ぼ田舎の奴でも其んな間抜な奴はあるめへと、金も取らぬに山猫か何かに引掻かれてもしちやア詰らねへ、ドラ好い加減に見切を付やふがと伺ほも十分に身動きの出來る洞の中を彼方此方と探り廻

す裸に不圖手に觸れし一ッの箱　治「イヤーあつた〳〵此奴ア何うやら本物らしいと目方を引くとズツシリ重味、手早く其蓋を叩ッ毀して中を探くると百兩包が五塊、暗黒世界で仏あるが治郎吉が莞爾笑つで　治「占めた犬骨折で鷹の餌食人間と云ふものは何んな處に斯ういふ間抜子の好い事があるかは知れねへ、と獨點頭き用意の胴卷の中へ其五百兩の金を殘らず入れて確乎結び内懐へ括し付け、ソロ〳〵表へ出やうとする途端、誰やら人の來るやふハッと驚き、摺れ違つて行過ぎやふとすると、一人ならず二人ゆゑ、了得の治郎吉も暫く躊躇して洞穴の中に少さく成て忍んで居ると　熊「サア阿爺さん危ないよ　三「ナア阿婆さん斯ういふ時は男より女の方が度胸の好いものだゝ前は何事でも人先へ出たがるから、チョイとお前瀬踏をして見て呉ンねへ　熊「何たね阿爺さん

其んな氣の弱い事を言ふものじやアあいよ斯ういふ事は男が先へ這入るものだよ　三「まア〳〵爾う云はずにお前切盗先陣をやつて呉れ　熊「本當に氣の弱い事を言ふね、お前は年を取たッて穴ッ這入が嗜じやアあいか　三「穴ッ這入が嗜だッて穴にも寄切だ此奴ア少し御免を蒙りてへや、何だか中から厭な風が吹いて來て爾うして如何にも暗いから提灯でも持て來れば宜かッたナ　熊「馬鹿な事をお言ひな、此んな仕事をするのに提灯なんぞを以て來る奴があるものか、サ阿爺さんビク〳〵もねへで早く行かねへか、とお熊婆がウ、ーンと三五郎を洞穴の中へ押入れる三五郎は線へ確かり掴まつて　三「イーヤ婆さん爰に何だか暖かい人が居る　熊「何だと人が居る、大きな聲をおしでないよ、尚ほも三五郎は手探りをして　三「イーヤ先へ誰か人が來て居る法院かー惡玉

かー法院かー探つて見ると五分月代の野郎頭　三「ヤー婆さん野郎が一人居るー法院ぢやあないか、慈姑の取手とは頭ッ振が違つてるぜ

是に至つて堪りかねたる治郎吉が、何も言はず三五郎の脾腹をばイヤと云ふ程ウーンと當てると三五郎、ウーン、ドターリ打ッ倒れて跡は聲もなし、其儘治郎吉は突然穴の中から飛出すと　熊「婆が熊「アー手前は何所の奴だ、先廻りをしやアがつて、此旨ェ仕事を見付やあがつたナ、と組付くを忽ち振ほどいて逃げんとするを、足を採て引戻さんとする惡婆の念力、思はず治郎吉はタヂ〳〵と跡へ下がる處を、お熊ハ突然懐から懐劍を取出し　熊「此野郎め意外邪魔をしやアがると突いて掛る刃物の光り油斷ならじと身を躱しクッとお熊の利腕を押へると同時に得物を奪取るが早いか

お熊に突ッ掛るお熊は己の得物を取られて先方へ勢を深へ其身が殆んど危きゆへ、是ア堪らんと忽ちにバラ〳〵と逃出す處を後の方より滅多突に突かんとする危き刃の下を搦潜つて逃げんとする時誤つて足を踏損し、草薙山の南の崖より遙幽の谷間へから〳〵、治郎吉は懐劍を振被つたが滑々たる所の溪流の音のみ耳に響きて寂寞たる光景　治「アハヽヽ仕留はせぬがコレで寂滅、アヽ危い事であつた、既の事に及物三味、可懼老婆、だ併し金は此方へ巻上げたし、是ア彌々運が向いて來たワイ、と獨り点頭き麓の方へ行かんとするを、蹌跟ろ〳〵三五郎が　三「迂奴ア何處の何奴か知らねへが途法もねへ蓄生だ、嘸アを何うした、お熊ハ何うした野郎迂奴ア俺の嘸アを何うかしやアがつた、此蓄生野郎、此時しも四ッの鐘コー〳〵と告渡る、廿三夜の月の出に苦しき息をホッと吐いたる三五郎が思はず見上げて　三「ヤー迂奴は書間二丁町の玉木屋で出逢つた松山の間夫の治郎吉だナ、と聲を掛ると　治「モウ斯う成ては百年目覺悟に及べと持たるお熊婆の懐劍で三五郎の右の脇腹めがけて拳も通れとウヽーンと突ッ込む、丁得強氣の三五郎も最初當身に脾腹を痛め漸く息を吹返し蹌踉い出たる其所を又もや脾腹を強く突かれてバタリ倒れて斷末魔　三「汝れ治郎吉ウーン、と悶掻くを取て押へまして馬乘に成しかヽり一ト刺ズブリッと突貫く、三五郎が苦むを見返りもせず　治「サ斯うなれば仇役、ヤイ三五郎末期の際に能く聽いて閻魔の廳へ土產にしろ、迂奴に預た五十両は氣を弛ませる此方の餌だ、アレから手前の跡を尾け、江戸屋の離室で壁一と重、夫婦惡事の相談を隱れて聞くも白波の世を駿河なる岩淵在、惡玉と異名の附いた法院に火

札を眼らせ、神崎屋から引出す金も五百兩江戸前の蒲燒より新しい話の筋先廻りをして大楠の洞へ這入て其金は疾に此方へ賂の餌食、老婆と共に冥途の道連れ、處もあらふに草薙山、二十三夜の月の上りに一ト際寒き清水港、念佛唱へて絶息て仕めへ、大向ふから「音羽屋ア」と云ふ聲が掛る夫は演劇、是は講談の速記本ゆへ何とも仰しやいませぬ、只、グヅ〳〵讀んで居らつしやる丈でございます是から治郎吉は後に証據抔の取落しのないやう確と氣を附まして三五郎の死骸も其儘谷底へ、と思つたが待て〳〵肝腎の五十兩先刻渡した……爾う〳〵川流れを出しては詰らねへ、と三五郎の懷から五十兩の金も取返し　治「ヤイ三五郎死んで往くにァ餞金は要らねへ六文ありァ澤山だ、と獨言を云ひながら三五郎の死骸をヅル〳〵此方へ引摺つて參り谷間へ望んでがう〳〵、跡白

波と治郎吉は道を換へて麓へ下だる、時に怪しい一人の曲者と招れ違つたが双方共に咎めもせず、後で考へれば是ぞ岩淵の惡玉法院でもありましたらふ、

却説治郎吉は是から清齒桑と云ふ處迄來る、昔立場のありました所、おき酢と云つて土地の名物、唯今では滊車が出來て通行をいたしませんが一寸した立場であります、治郎吉は此所から轎輿を一挺を傭ひ其轎輿に乘て一里半、新通まで來て舁夫を返し、新通を眞直に二丁町へ來て大門を這入り何氣なき体に持做して小松屋の門まで來た時は、モウ彼此夜の子の刻頃(今の十二時)引過でありますから二丁町も閑として居る、今大戸を卸さふとする所へ表から治「清ぞん眠からうノ　若「イヤ治郎親方ですか能く入らつしやいました、華魁はモウ疾間ッから貴郎が何所へお出あすつたかつて、

傳馬町の萬屋へ聞きに往つて來いッて、本當に萬屋へお百度參りをいたしやした　治「爾うかい寶は先刻玉木屋で華魁に逢つたが何うしても部屋へ來て一盃やらふ又氣が變つて好いからと約束をして表へ出ると江戸の友達に出ッ會して詰らねへ處で今まで引留られたが何しろまア二階へ上ると仕やふ　若「サ切盃お上り を願ひます、おしげどん治郎親方がお出あさいましたから松山華魁に、と階子の下から聲を懸ると鴇母部屋からおしげがデク〳〵した体格で　しげ「オヤ〳〵まア治郎さん華魁が大變心配をして早くお上んあさいよ、チヨイと松山さん、華魁エ、若し松山華魁エお前さん餘り愚痴を言ふものじやアないよ、治郎さんがお出なさいましたよ、懇しい人が歸つて來たと云ふ聲を聞いて松山が上草履を片チンバに履いてバタ〳〵ビタ〳〵出て參り　松「何うしたノ

お前さんアレ切じやアあいか、玉木屋の親方がお着までスッカリ拵へ待て居たのに、アレ切形も見せず万一旅籠屋の方へでもお出でなさりはしないかと新町の万屋へ文どんを頼んで二度三度やりましたら、柳行李のお預りはありますが如何いたしませふなんテ詰らない事を文どんが聽いて來て、吾儕は本當に腹が立つて腹が立つて仕樣がなかつたが、今迄何所に何をして居たの、大方友達に引張られて何所かへ行つたンでせふ、人を散々待たして置いてサしげ「華魁まアお座敷へ、廊下で御夫婦喧嘩は法度でございますよ、早く彼方へお連れあさいましよ、是から座敷へ來ると新造か眠さふな眼を刮りながら　新造「治郎さん大概におしなさし、華魁に氣を揉ましてサ　治「何だお前までか同じやうな事を云ふ何しろ早く何か爾う云つて呉んな爾うしておしげどんや文どん查間骨を

折て呉た人達を呼んで一盃やると仕やふ　松「アヽ爾うしましませふ、誂物は今吾儕が仕ますが、お前さん何處に居たい　治「ナニ一ト風呂這入て歸つたら一盃飲んで直に寐やふと思つたンたか困つた奴に出ッ會したのだ、大門際で、お前方は何處へ行くと聞いたら上方へ行くのだか何しろ开處まで附合へと阿部川を越へて宇津ノ谷峠まで行つたか、何日まで行つても名殘は尽きぬから別れやふとしたら何しろ鞠子まで附合へと云はれ、鞠子の大米屋と云ふ家へ泊り込んで、まア聽きねへ是非泊まつて往け、爾うして土地の名物をトロヽ汁を喰へと云ふのだか其んなものは喰たくねへから其野郎達のトロヽの喰ふのを見て四ッの鐘を聞いて無理に振切て駕籠に乘て歸へつて來たが詰らねへ事で氣を揉ませたッけナ　松「本當ですか　治「本當サ　松「オヤ治郎さんチョイ　治「何だ

松「左の袖に大層血か附いて……　治「エヽ……ナニ是ア阿部川の渡頭か出るの出ねへのと云ふから俺か渡守に一歩やるから出して呉れと云つて一歩の勢で二人船頭此方何屋へ船が着くと御仕置場から悪い狗が飛出して無暗に吠へやアがるから仕方がねへ、殺生はしたくはねへか其犬を叩ッ斬つてやつた其時の血か跳たんだらふ　松「オヤ爾う、まア怪我かおくッて宜うでざんしたけれども血の附いてるものなんぞワ着て居ずにお脱ぎなさひよ、と單笥の袖斗から結城紬の治郎吉の不斷着を取出して着せまして

松「夫じやア吾儕は誂物をして來ますよ　治「ウム爾うしねへ、今夜大引まで一盃やらふ、爾うして眠くッて仕やふがねへから寐ると仕やふ　松「ハア其方が宜うでざんせふ、と出て往つた跡では治郎吉が新造に詰らぬ用に吩咐て使にやり、其隙に懐から取出した五

百兩の金子を其頃の金でありますからナカ〳〵重い手提く締の附いて居る箱笥の隠しへ之を押込んで、何喰はぬ顔をして居る裡に母のおしげ、若い者文藏、松山の新造二人都合五人でチョッと小酒宴を催ふして其夜は何事もなく無事に終つて其翌朝は平日もよりは朝寝をして居る所へ、華魁に少し御目に掛りたいと云つて入り來ると云ふ、是れ何者でございませふか……」

第十一席

此時に松山は　松「當やんかへ　當「ヘイ左樣でございます　松「大層早く吾儕に逢ひたいと云ふ人は誰だへ　當「ヘイ何でございます、アノ三五郎さんのお内儀さんのお熊さんで、アノ華魁の阿母さんだと云ふお方で　松「アレ、何うしたんだらうテまア、若し治郎さんお聽きなんしたか今吾儕に逢ひたいと云つてお熊婆さんが來たと云ひますか本當にまア不思議じやアありませんか、皆お前さんのお蔭で親子の縁が切れてお金まで出してお買ひ申て其翌日又お熊婆さんが來るといふのは……何だか仮にも親子たから吾儕か斯ういふ事をしてお前からお金でも出させたやふに疑られても厭ヒやアありませんか、吾儕にア隘張理由が分りませんよ、爾うして見ると三五郎がまだお熊婆さんに話さないと見へまする大方婆さんは何も知らずに來たのでありませふと云ふを聽くか否や治郎吉はムックリ起上つて　治「其んな事をわうふよ、けれ共三五郎には僅に金を渡し玉木屋の親方が立合人とあり証文に爪印まで捺て居る爪印をすれば實印も同樣此方には確實な書付があるからお前何も驚くにア及ばねへ、婆さんの來たのは何か別な事だらふ、花魁沈靜いて居あせへ、俺が逢つてやるから松山は不審

な顔をして居る、

此裡にモウ廊下の入口まで來たと見へて　熊「モシ花魁其んなに御心配には及びませんよ、委細は夫へ出てお話をいたしますから」と皺枯聲にて申ながら入來たるお熊婆、前にも一寸述べましたる通り年齢五十有餘、昔時は一寸男を惱ましたと云ふやふな樣子、何所か凄身のありまする差詰尾上松助の役廻でもあらふかといふ惡婆が苦笑をいたしながらスーッと這入て來た、治郎吉は火鉢の向ふに居りまして　治「サ、阿母ア此方へお這入んなせへ　熊「ハイ御免下さいまし、花魁今日は……此一兩日は大層お冷しくありました、就いては花魁へお前さんの御客で治郎さんと仰しやる江戸の親方さんハアー親方でございますか　松「ハア是が治郎でます治「エ、吾可は和泉屋の治郎吉と云ふ江戸の破落方でエすか、始め

て御目に掛りやす、お前さんの御良人三五郎どんに昨日玉木屋で御目に懸り色々委しくお話をいたしましたが、まだ掛違つてお前さんにア御目に懸られへ就いては一寸御話の前に言つて置くが何んな御用か知らないが、松山とお前さん方とはそら縁が切れて居る筈だが、其縁の切れた松山の處へ來て吾儕に逢ひたいと云ふのは夫は餘り遠い話だが、夫とも亦何か別口の話でもつて……熊「ハア夫はそう仰しやる通り私の方では縁の切れた事も知つて居りますし又三五郎から末熟ながら證文迄も差上げて置いたとの事お金も確に取受たに遊ひおざいません、シテ見れば松山さんとは親ではおし子ではおし、況てお前さんとは御縁が遠うございますが是は全く外の事でゑりましたのでございます、併し此所は女郎屋の二階、人の耳に聞こへちゃア吾儕の方では搗はないが、貴

郎方の御爲に能くありませんから一寸次の間へ障子を締て此三人切で御話をいたしませうと何か一ト思案ありげに後ろの障子をパッタリ建切ました　熊「さて松山さん親方さん始めて御目に掛りまして愚痴やら夜迷言やら色々面白くもないお話をしなければなりませんが、成程唯今仰しやる通り三五郎と御相談をあつて親子の縁が切れたには違ひありませんが改めて此お熊婆が次郎親方にチイッとお願ひ申たい事があつて參りました江戸のお方は抑も義侠心で強きを挫き弱きを助け、昔で云へば花川戸の助六とか幡隨院の長兵衛とか……　次「オイ〳〵阿婆さん朝ッから人を堂揚ちやア往けないよ、吾儕ア其んな者じやアねへ、高が端下の破落戸だ、夫も江戸を喰詰て仕方あしに上方くんだりを迂路附いて居るが今度友達の招きに依つて久振て故郷へ歸るのだが、花川戸の助六兄イだう幡隨院の長兵衛だの抔と役者を上げられちやア困る其んな事は何うでも宜いが長い前置はさて置て肝腎の話と云ふのは……　熊「お話と云ふのは外じやアありませんが私も誠に不仕合で此子とは縁が切れ良人三五郎殿にも別れて仕まい今は實に何うするあとも出來ませんから、一ト先故郷の上吉田村へ引込んで今度發心をいたしまして、坊主にでも成て爾うして良人の跡を弔ひ今まで犯したる罪咎の御詫を仕やふといふ了見で、今からでは些ともウ遲れ走ではありますが、尼法師なる積でございます、夫ゆへチョイと御暇乞旁貴郎に勸化に附いてお貰ひ申たうございますからハイ　治「ソー夫じやア昨日まで壯健で居なすつた三五郎さんに若しもの事でもあつたのかい、人は見掛に寄られねへものとは云へ、何うかなすつたかへ　熊「ハイ、エヘ〳〵、

妙な處でまア……申さずとも宜しうございますが、勘化に附いて
敵きたいと云ふ事丈を一寸申上げましたので　治「ウェー線も由
緒もねへ往來中の辻堂の前で、合力を願まれゝば殊に依つたら百
や二百の端下錢を施すあとも出る、況てや松山と長い間、仮の親子
の縁のあつた人だから夫は隨分寄進にも附きやせふが、シテ其金
高は幾らと云ふ吹ッ掛たチ　熊「イヱ吹ッ掛と仰しやいましては
些と穏やかでないお言葉でございますが、ナニ澤山じやアありま
せんが、貴方の身分相應あんで本當あれば五百五十両お貰ひ申せ
ば夫で損も徳もないのですが、其んなに餘計の事は申ません、大負
にまけまして親方一本お出しあさい　治「エ、何と……一本と云ふ
のは百両かへ　熊「ハイ、江戸でも稱う云ふ事を申ませふ、が此邊ま
でもチ一本と云へばまづ百兩サチ、と松山の片脇にあつた朱羅宇

の煙管を手に把て　熊「華魁一すお貸しなさいよと引寄せて、煙草
パク〳〵憎体面、此時お熊婆のお熊婆たる本態を顯はした樣子、治
郎吉も猿者　治「成程妙な事を云ひなさる、五百五十両貰ひてへの
だか大負にまけて一本、ハー夫ア夷子講の魁の賣買直段のやふだ、
高の知れたる破落戸風情ゆへ、二歩か三歩の端下金あら知らんこ
と、亭主に別れて尼になり庵室でも設けるから其勘化に付いて呉
ろと云ふならば、先づ大概相場は極まつてる、百兩あゞしはお前覺
てまて寝言を云ふんだナ　熊「親方吾儕も能く度稱う來るだらうと
思つたから、手振じやア參りませんよ、チョイとお前さんに御目に
懸るものがある、若し又此が御眼必で御入用と云ふあらば差上げ
ても宜い、吾儕の方では却つて樂にあるからサ、此品で切望百兩、出
してお呉んあさい、と紺唐草の古い風呂敷に包んだ何やら丸き

物を、治郎吉か松山の間へズィと差出した　熊「親方是を解いて館く見て下さい小口を開いて松山はヒョイと覗き込んで　松「ヤ、是は三五郎さんの首……と思はず聲を上げる、治郎吉は言葉忙しく之を制して　治「靜にしろッ、素人らしく何だ多寡が生首だらふぢやねへが　松「だッてね前さん昨日まで アンなに憎まれ口を利いて居た三五郎さんが……　治「夫がよ昨日まで活て居やふが、今まで饒舌て居やふが首に成てはモウ仕方がねへ、婆さん此んな物を無暗に人中へ出すものじやアねへよ、早く其方へ仕まつてお置き、ウム、分つたから、仕舞つてお置き、女郎屋の二階で生首あんさアドウトしねへから　熊「エヘヘ、モウ御目に懸さへすれば夫迄の工と、治郎親方三五郎は何所で死んだと先刻の御尋ね、此んな老婆でも一生連添ふ亭主をおざいます、端他では可笑くお想ひあさらう

が少しは吾儕の身にも成て下さい、別つた處もありませんのに、草薙きの明神の森、而かし昨夜の月の出潮に、果敢ない最期を遂げました吾儕も一旦は谷底へ突落され、半分死んで居ました處へ後から來たのが亭主の死骸介抱をして見やふとは思つたが、餘程の深手で止めまで刺され、何うする事も出來ませんから、夫からフッと氣が付いたは此死骸を谷間へ置けば、野猪、豺狼の餌食と成て死んでの後まで浮まれず、責めては首丈でも持て故郷へ歸り基標でも建たいと、歸らぬ愚痴ではありますが、此人の腰に差してた脇差を抜いて岩角を枕にいたし丁稚が鮭でも切るやうに、漸く切取た亭主の首、泣く〳〵一ッの風呂敷包み、外に相談相手もおざいませんから前後の事を何にも言はず松山の御客さん、治郎親方とやらに御目に懸り、理由を話してお頼ゥ申たら何うにかならふと心附き

ワザ〳〵是迄參りました事の次第は申さんとは御承知のことでありませふ親方へ、本當ならば五百兩は此人のもの夫が此人の身に附いたものは一文もなし、又貴郎からお頂ひ申た五十兩道入て居た胴卷までも振つてある、餘ッ程憂い仕事をする人が、昨夜アノ邊に居たと見へます、併し返らん愚痴は何遍言つても同じ事、大負にまけませうから、切望此首を見て格別の御慈悲で百兩丈吾儕に恵んでやつてお呉んなさいヲ、親方宜しくお願ひ申ます、此時まで了得の治郎吉も何ども言はず腕を組んで考へて居りましたが、此老、婆ナカ〳〵一ト筋縄では往かぬワイ、迂濶りすれば昨夜の始末一伍一什の事譯を明白處に訴られ、首を証據に出された日にア、差引あらぬ此場の仕宜、是は何でも欺して歸へすが一の手と心付きましたから　治「イヤお熊さんとやら、お前の方にも色々話もあら

ふけれど、夫も是も殘らず打棄て仕まひ、切望に任せて百兩と云ふ金を今渡すからまア沈着いて居あせへ、婆さん空涙なんぞを繰すにア及ばねへ、　熊「イエ空涙じやアありません、鬼の目にも涙とやら、本當の涙でおざいますよ、少しは吾儕の心根も御推量なすつて下さいまし　治「華魁其筥笥の小抽斗に胴卷がある、其中から百兩出してやるが宜い　松「親方何だか松山には、諏波離譯が分りませんよ、爾うして親方何うして百兩のお金が……　治「エヽイ其んな事を云ふにア及ばねへ、出してやれば分るまとだ、松山はブル〳〵震へあがら己の筥笥を開けると、隅の方に一ト塊に成て居る胴卷怪みあがら中より百兩の金をゴロリと出して　松「治郎さん是れさますが　治「ウム夫だ……サ婆さん百兩數を改めて受取んなせへ　熊「イエ改めるには及びません、左樣なら確に受取ました眼前